

行動記号論のデザインング

——人間行動と情報・記号・意味——

嘉味田 朝 功

Designing of Behavioral Semiotics

by

Choko KAMITA

目 次

- I. 本稿の概要
- II. 概念図式を中心とした行動記号論の概念
 - 1. 意味図式
 - 2. 実践的側面
 - (1) 個人と集団
 - (2) 集団と組織
 - (3) 社会と個人
 - 3. 理論的側面
 - (1) 社会科学
 - (2) 記号学
 - (3) 情報・制御・システム
 - (4) 生命科学
- III. 目次図式による主要領域の概観

I. 本稿の概要

はじめに、行動記号論というテーマを考えるようになった経緯およびその研究方法をめぐって、簡単に述べる。

行動科学と情報社会

1950年代から60年代にかけて、私がUCLAに留学していた頃、行動科学はアメリカ経営学に大きなインパクトを与え、将来多くを期待さ

れていた。だが、その後、目ざましい発展は遂に見られなかった。特にオイル・ショック以降は、日本にあっても、経営学、企業の実践活動の両面において、行動科学のインパクトは縮少の一途をたどった。

そこで、その理由を推察するに、いろいろの要因があると思われるが、決定的なのは、行動科学の基盤部分が“人類史的な時代の転換”という地殻変動に対応できなかったところにある、と判断する。情報社会のキーワードは、多様性・同時性・選択性にある、と言われる。

私は、このような情報社会に向けて行動科学はどうあるべきか、という問題意識の下に模索を続けてきた。だが答がみつからないどころか、より根本的な疑問にぶつかってしまった。つまり、「自然科学で実績を示した、西洋流の現代科学の方法が、果してそのまゝの形で人間研究にも適合できるのか」と。

新しい知見と行動研究

その疑問はひとまずおくとして、西洋思想の最先端を行く〈システム論〉は、今日、次の様な課題と取り組んでいる。

(1)主一客の統合、(2)全体性、(3)階層性、(4)自己組織化、(5)モデルと現実(仮構と実在)

これらの課題に対して、〈記号論〉は有益な

ヒントを提供している。すなわち、記号論における「統辞的關係」、「範列的關係」という「コード」によって「意味」を生成成立させる「構成方法」は、「全体性」、「階層性」、「自己組織化」などと深く関わる。また、「記号とその使用主体」、「指示対象と意味」は「主—客の統合」、「モデルと現実」、の問題に関連する。

一方、(1)人格行動、(2)集団行動、(3)体制行動を、(1)記号素、(2)記号、(3)記号集合、という各階層によって記録・伝達される「意味情報」の生成発展という形で関係づけることができる。また、「行動の記号化」を通して、行動研究の最も基本的な単位として「役割行動」を据え、これとの関係で、「反応行動」や「動機行動」、「制度行動」などをシミュレーションすることもできる。

また、生物学の自己組織化における「ゆらぎ」や「引き込み」現象、数学におけるフラクタル現象といわれる「自己相似形」など、他分野においても、従来には存在しなかった全く新しい概念なども、これからの行動研究には欠くことができない。

行動記号論の方法論

ここで先の疑問点に戻る。すなわち、もともと砂漠の風土から発達した西洋の科学の方法論で、“生身の人間のまごごとを、あるがまゝに”問題として正しく扱うことができるのかという疑問である。私の答は、半分まではできるが、それ以上はできない、というものである。残りの半分は、東洋の「“行”の精神とその実践」で補完されなければ、人間研究は完成しない、というのが私の信念である。

つまり、対象を徹底的に対象化して、明晰な言語によって理解に到達しようとする西洋の基本姿勢と、対象と徹底的に一体化して、身体によって了解に到達しようとする東洋の基本姿勢の両方が、合体統合されてはじめて、人間の真の实在が、その真の姿を人間に対して、表してくれるものと確信する。

そこで、「行動記号論」の具体的な方法としては、システム論を軸に、経営学のバーナード、社会学のパーソンズ、記号学のソシオール、その他西洋で開発された重要な思想や分析概念を、東洋思想の記号表現として完成されたまんだら図の中に組み込み、「判断と行動の意味図式」という祖型を作成し、これを「コード」として、人間行動の統合的研究を行ない、また絶えずこの祖型に戻っていく、という“知識の環^{ループ}”を形成していくのが、行動記号論の発想である。

とはいえ、異分野の諸概念の統合をはかり、実用に耐えうるものに定式化し、これを使って社会・人間的事象の解明と乗り越えを行うというのは、容易ではない。取りあえず本稿では、「判断と行動の意味図式」のラフな形を提示し、併せて既存の重要な概念図を整理して表示し、次稿における本格的な論議のための準備作業とする。

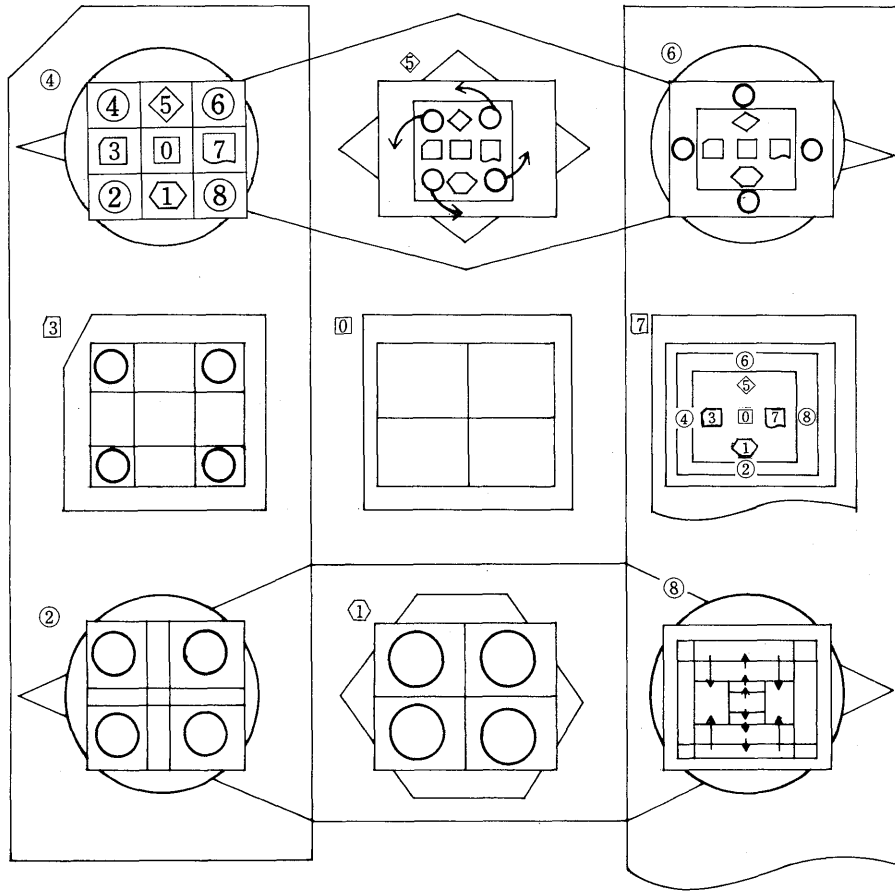
II. 概念図式を中心とした行動記号論の概要

概 念 図 式 一 覧 表

- | | |
|-----------------------------|---------------------------|
| 1. 意味図式 | 25. 80年代を生きる日本人へのメッセージ |
| 0. 本稿のコード | 26. 文盲とは |
| 1. 知識的意味図式 | 27. 成熟社会の相貌 |
| 2. 判断意味図式 | 28. 家庭基盤に関する基本的考え方 |
| 3. 行動意味図式 | 29. まんだらの位置 |
| 4. 意味図式の意味 | 30. 道元禅の構造 |
| | 31. 正法眼蔵現成公案 |
| 2. 実践的側面 | |
| (1) 個人と集団 | 3. 理論的側面 |
| 5. [] 氏の認知読取りシート | (1) 社会科学 |
| 6. 認知読取り演習の進め方 | 32. 社会システムの構造と変化 |
| 7. 認識と記号 | 33. 社会システム論 |
| 8. 認識ギャップ調整ワークシート | (2) 記号学 |
| 9. 意思決定場面における機能的役割行動 | 34. 文化のフェティシズム |
| 10. 役割行動読取りシート | 35. 記号論への招待 |
| 11. 概念明確化テスト例 | 36. 人間の情報処理 |
| 12. フィードバック実習の進め方 | 37. イメージと人間 |
| 13. 自己像の解明ワークシート | (3) 情報・制御・システム |
| 14. 自己育成の進め方 | 38. ホロンによる自己組織化 |
| 15. 多人数教育における行動科学的試行 | 39. フィードフォワードの4つの種類 |
| (2) 集団と組織 | 40. 影響力と権限 |
| 16. 経営・組織体質強化への組織開発アプローチ | 41. 新しい人間科学の立場 |
| 17. 職場状況の解明図式 | 42. 大脳半球間相互作用の方式 |
| 18. 職場状況の解明ワークシート | 43. 人間行動の階層構造 |
| 19. 日本の会社および地方銀行の支店状況パターン分布 | 44. 情報代謝の経路 |
| 20. 職場診断構造機能マトリックス | 45. 認識とパターン |
| 21. 職場状況解明のためのアンケート | 46. システムの新しいかたち、フラクタルについて |
| 22. 職場の体質強化の方法 | (4) 生命科学 |
| 23. B支店の職場状況の解明事例 | 47. 生命現象のダイナミズム—1 |
| 24. 営業店管理者通信講座例 | 48. —2 |
| (3) 社会と個人 | 49. 脳の分業体制 |
| | 50. こころの量子論—1 |
| | 51. —2 |

図0 本稿のコード

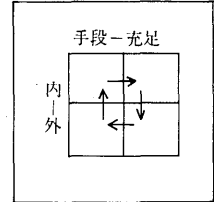
二重分節による〈場所・形・意味〉の自己相似的自己組織化



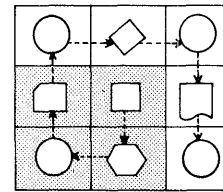
形の意味

- ③ = インプット
- ⑦ = アウトプット
- ⑩ = プロセス
- ⑤ = 判断
- ① = 記憶
- = サブシステム

場所の意味

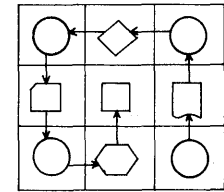


知覚現場的判断



(生活世界)

概念思考的判断



(機能世界)

図1 知識意味図式

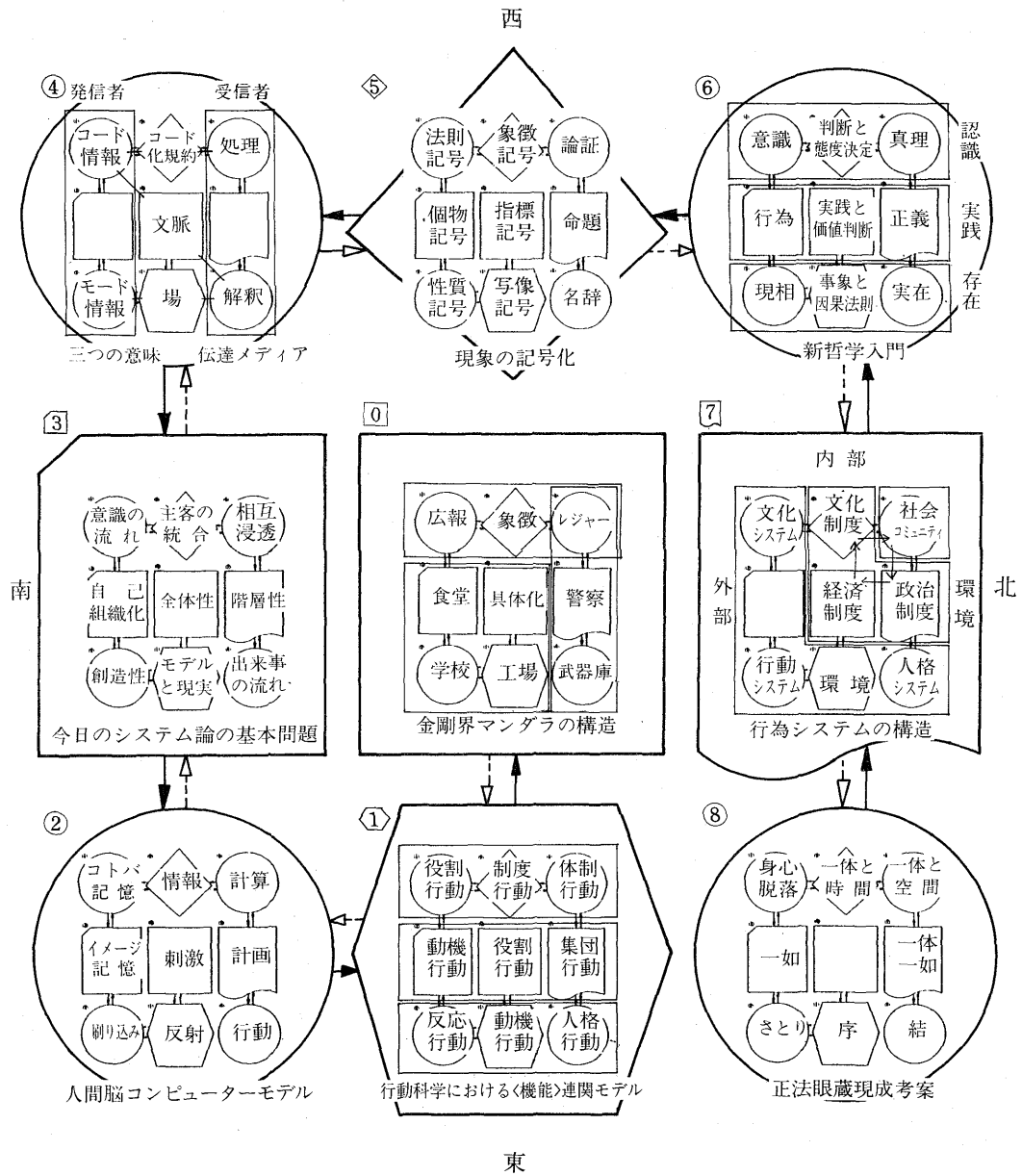


図2 判断意味図式

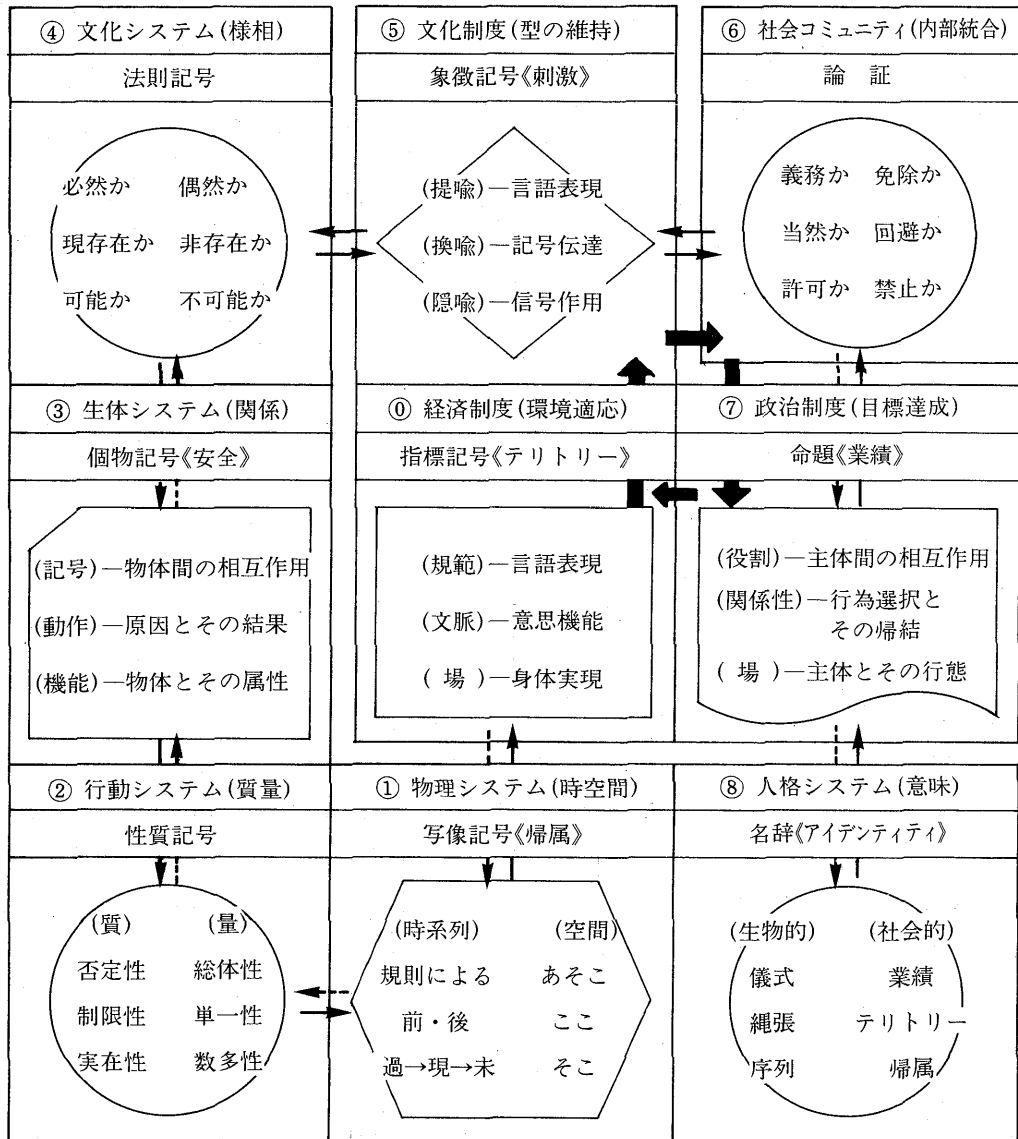


図3 行動意味図式

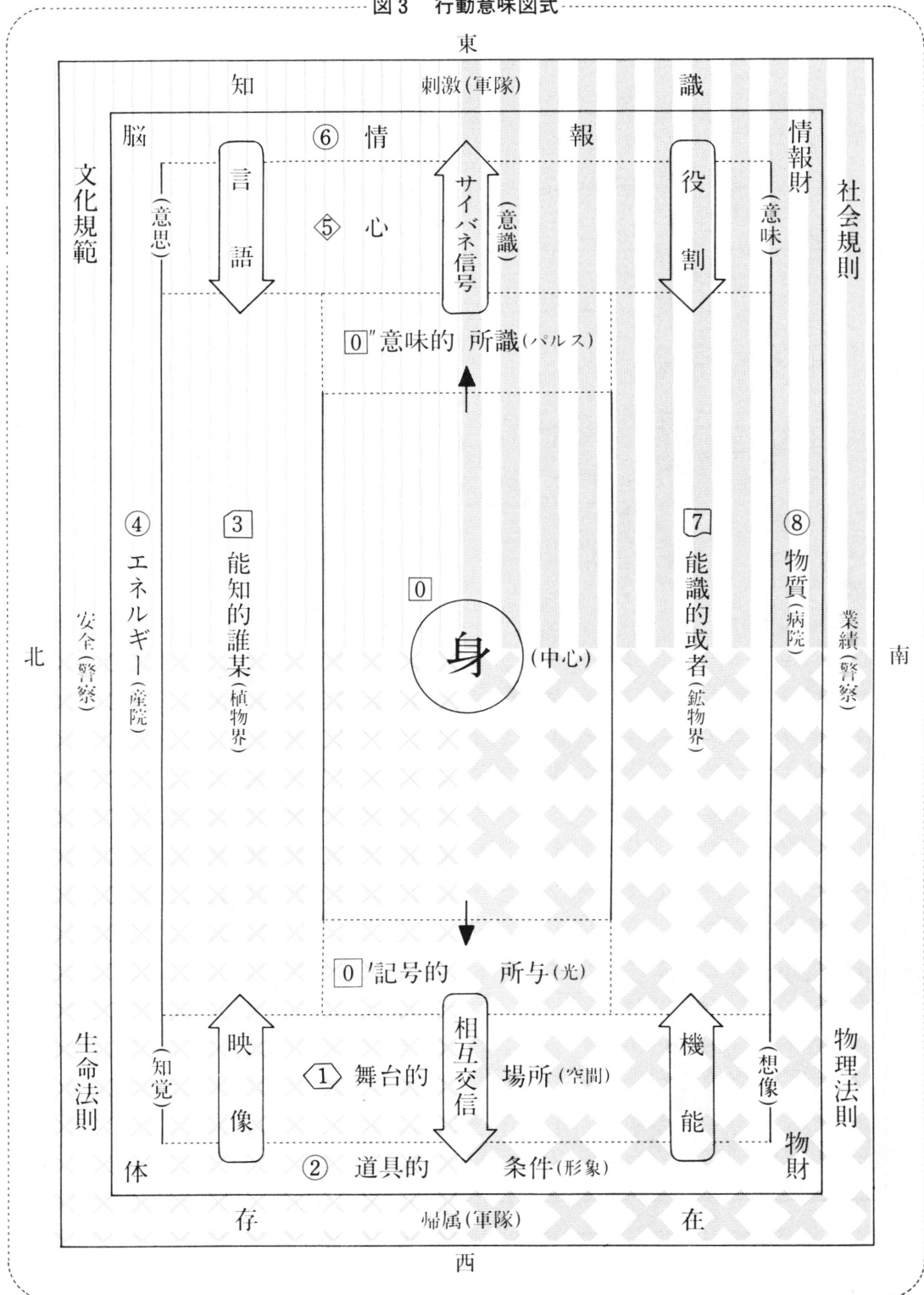


図4 意味図式の意味

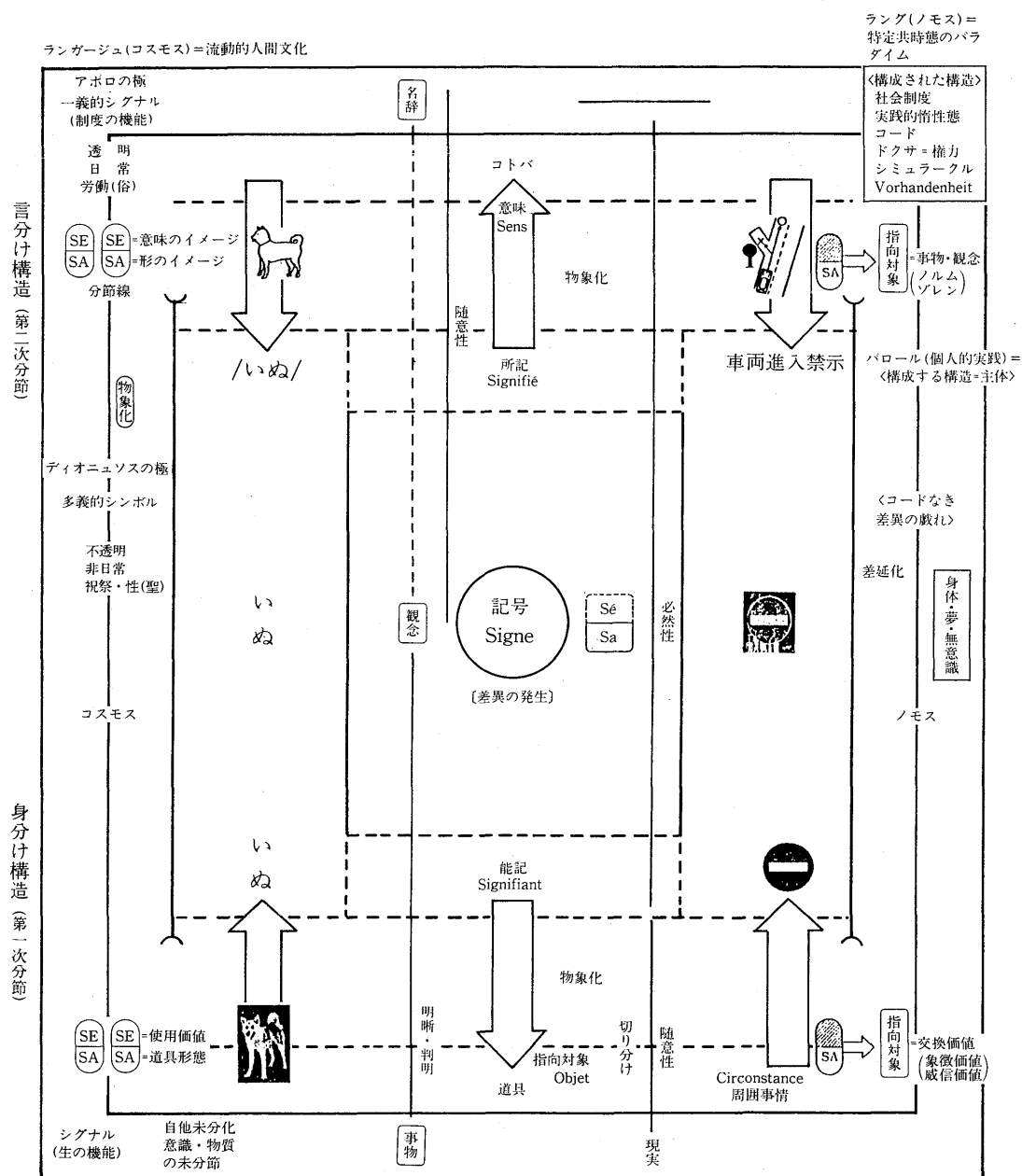
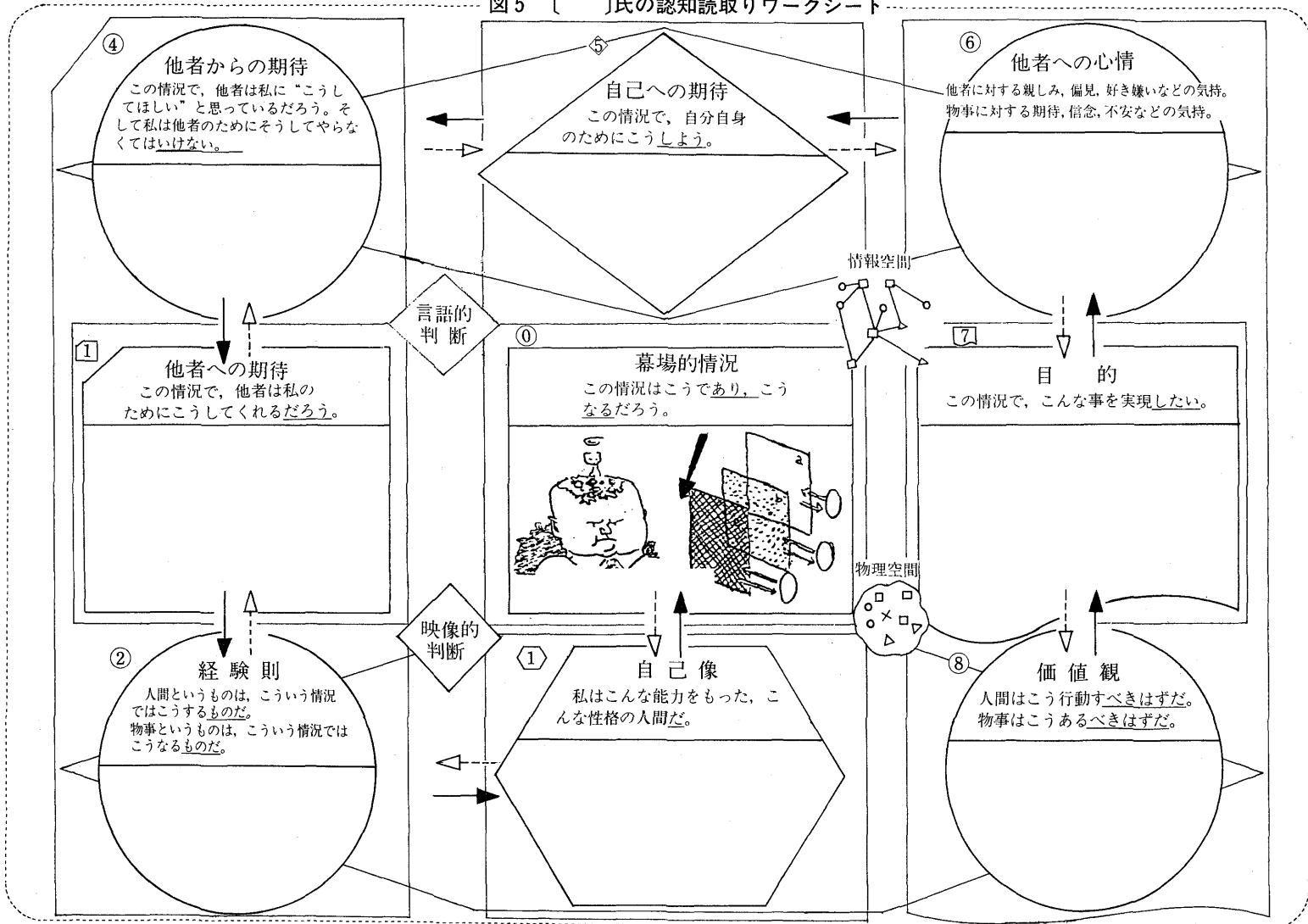


図5 []氏の認知読取りワークシート



1988. 5. 12. by Choko KAMITA

図6 認知読取り演習の進め方

(1) X氏の認知読取りワークシートの書き込み

- ① 「認知読取りワークシート」を各人にわたす。
- ② X氏を決める。
- ③ 全員がタイトルの空欄を書き込む。
- ④ X氏は自分の思っているとおりを書き込む。
- ⑤ 他の人は、X氏が書き込むことを推察して書き込む。

従って、＜私＞とか＜自分＞は、＜X氏＞のことで、＜他者＞とは、X氏にとっての他者、つまり＜われわれ＞をさす。

(注)

○＜価値観＞、＜自己像＞、＜経験則＞は、たいへん幅広いが、“この情況”に関係の深い側面に焦点をあてて書き込む。

○1 枠には、主なものを2項目以内にしばって書き込む。

(2) X氏の認知読取りワークシートの判定

判定は、1人が続けて全部やるのではなく、＜目的＞の項を全員がやり、次に＜義務感＞に移る、という順序で進める。

- ① X氏の右隣B氏が、自分の書き込んだ「文」を読みあげる。
- ② X氏が「判定」を言い、B氏は「記号」を書き込む。
- ③ C氏、D氏、……と続ける。
- ④ F氏まですんだら、X氏は自分が書き込んだ「文」を読みあげる（判定に疑問があっても、ここでは質問しない）。
- ⑤ 次の項に移って、再びB氏から始める。
- ⑥ 全部が終った時点で、判定についての疑問があれば、X氏に質問する。

状 態	判 定	記 号
両 方 が	① ほとんど一致	「大 当 た り」 ◎
	② わりと似ている	「中 当 た り」 ○
違っているが、 読まれた内容に 対してX氏は	③ そう思う	「小 当 た り」 ○
	④ ややそう思う	「ま あ ま あ」 △
	⑤ そう思わない	「は ず れ」 ×
	⑥ わからない	「何ともいえない」 ?

図7 認識と記号

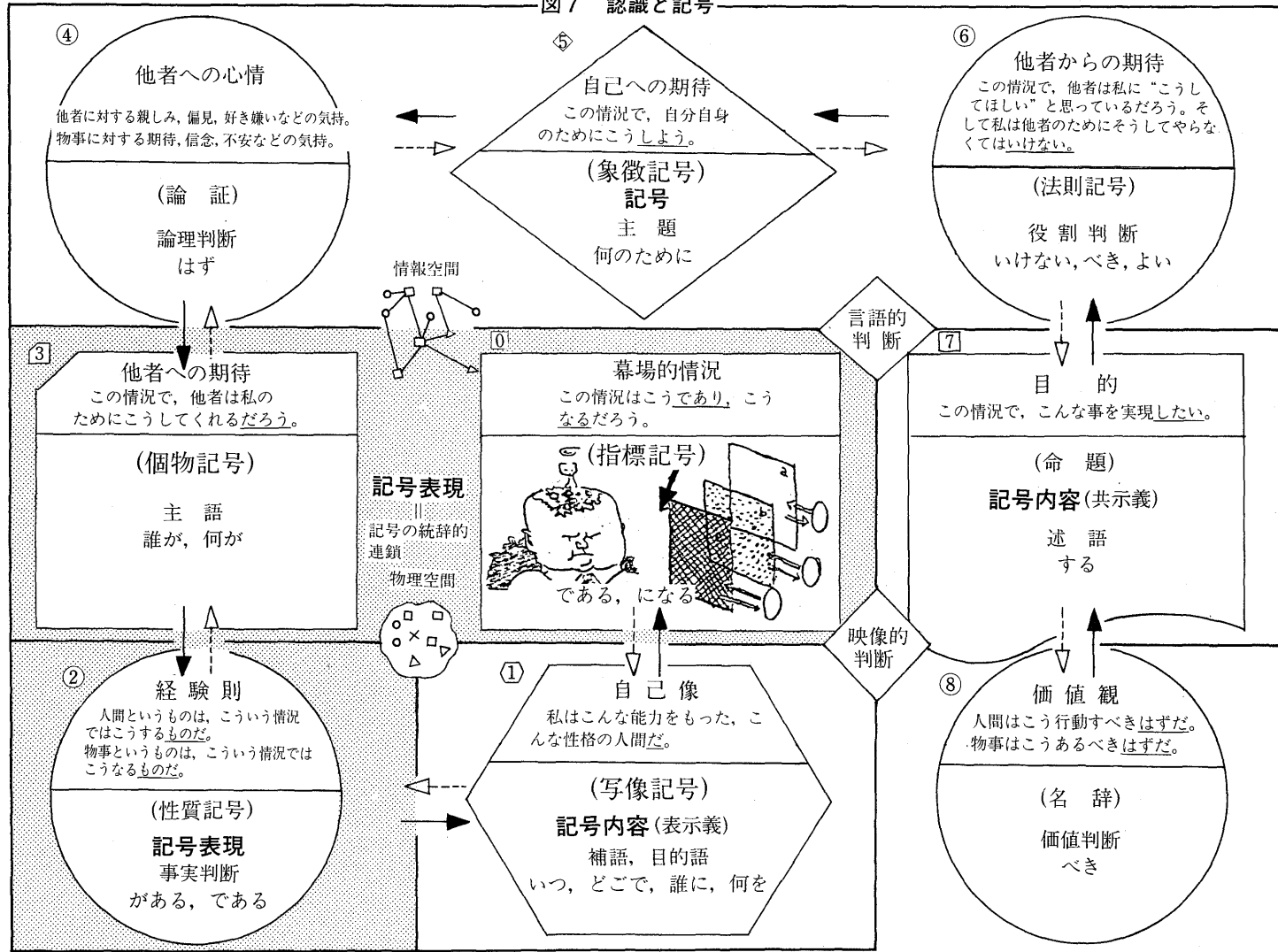
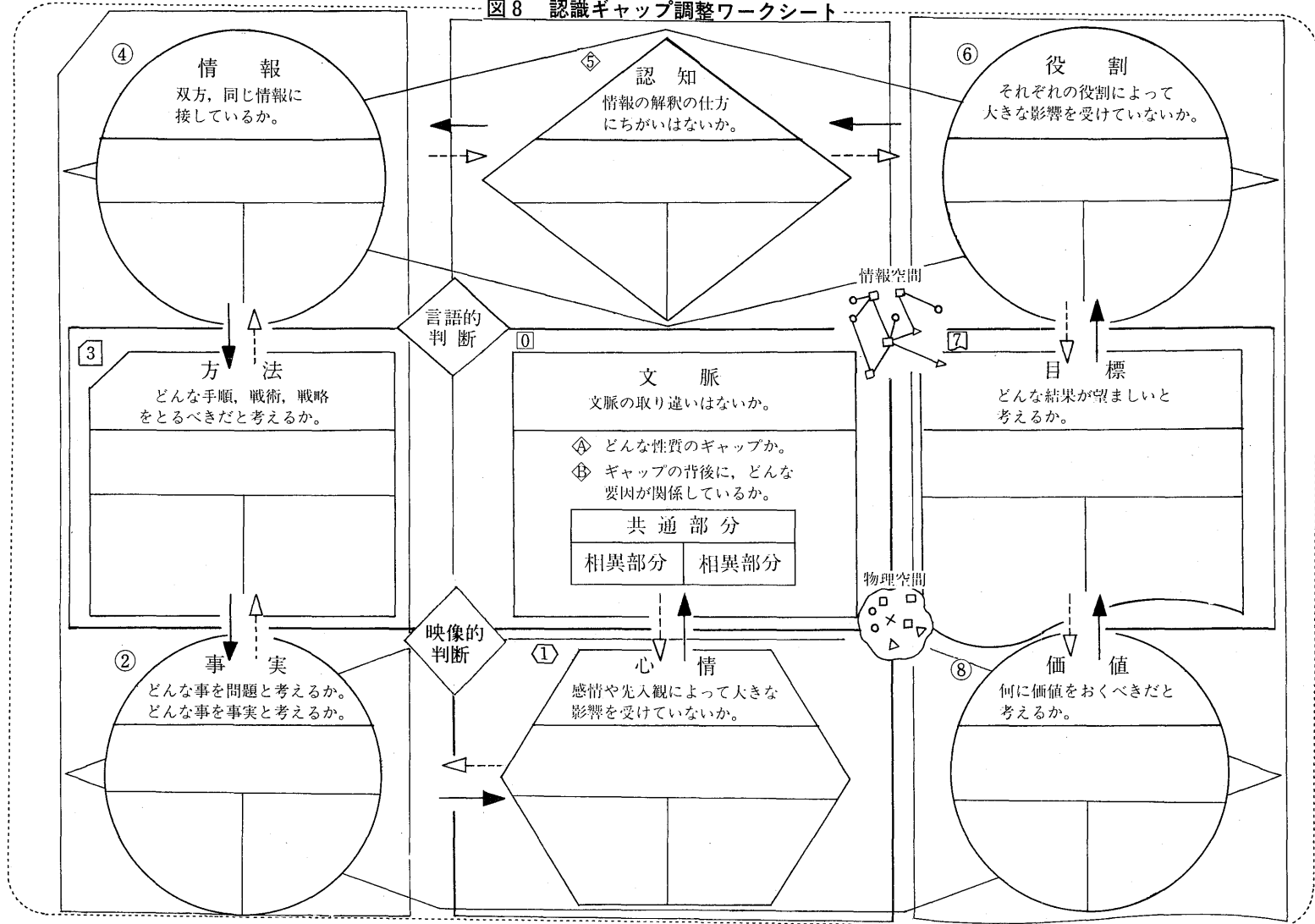


図8 認識ギャップ調整ワークシート



1988. 5. 12. by Choko KAMITA

図9 意思決定場面における機能的役割行動

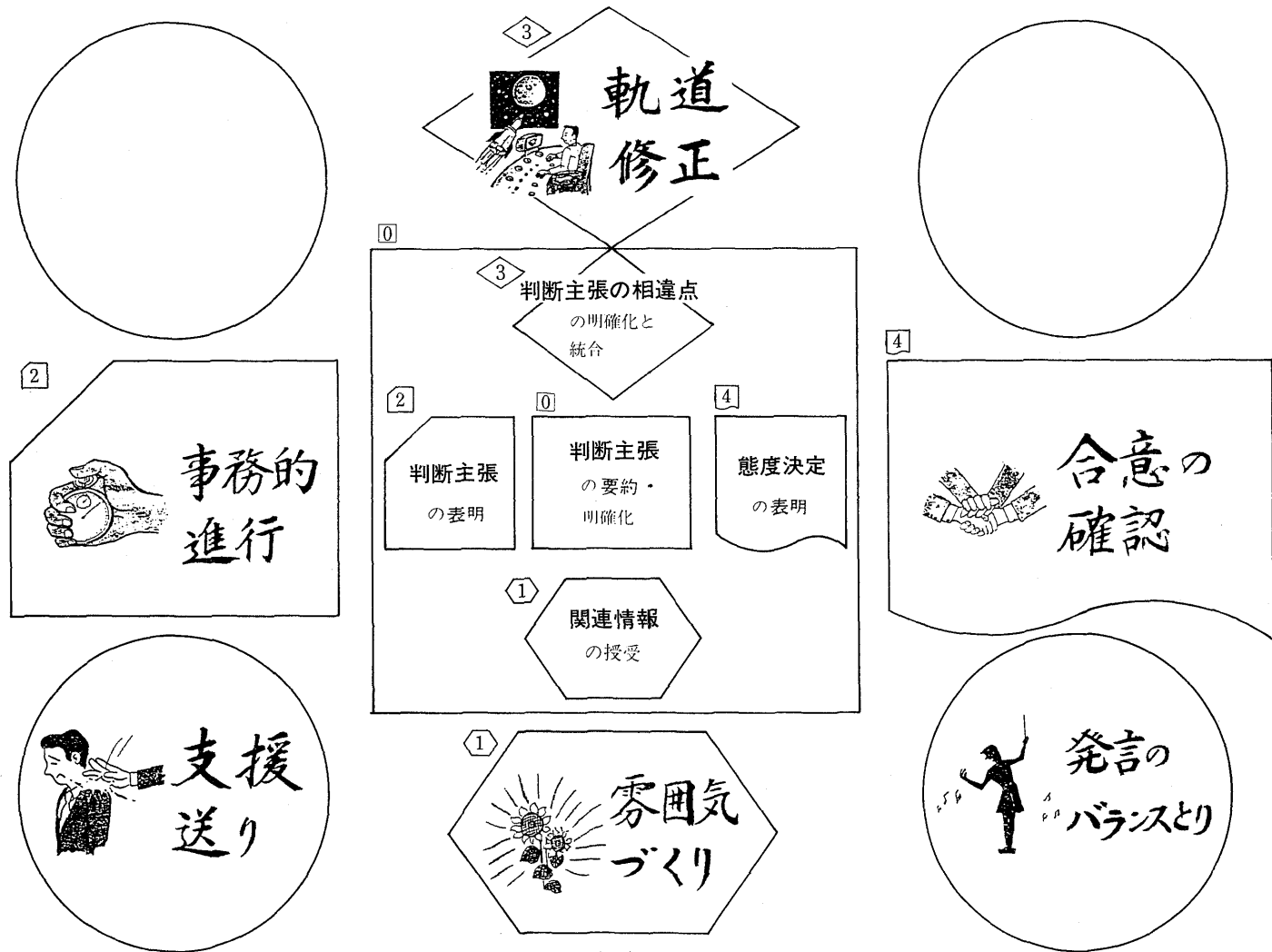


図10 集団意思決定場面における機能的役割行動読取りシート

機能	記号	行 動	全 体	私	計 算
④ 決定内容の質的向上の役割	①	判断主張を要約し、明確化をはかる。			
	①	関連情報を求める。			
	②	判断主張を表明する。			
	③	判断主張の相異点を明らかにし、統合をはかる。			
	④	態度決定を表明する。			
		%			%
⑤ 協働体意識強化の役割	①	集団の雰囲気づくりに働きかける。			
	②	討議の進め方について述べる。			
	③	集団の達成水準を高めるために働きかける。			
	④	集団としての態度決定を確かめる。			
	⑤	相手に安心感を与えるために働きかける。			
	⑥	発言力のバランスをとるために働きかける。			
		%			%
⑥ 集団活動に障害となる機能	1	集団の努力に水をさす。			
	2	でしゃばる。他人の発言の途中で割り込む。			
	3	言いわけ。ピントはずれ。冗長。			
	4	なかなか発言しない。			
	5	意見の固執。			
	6	感情的な発言。			
		%			% 総計

行動型分布率表

グループ						
%						
④ 型 行 動						
⑤ 型 行 動						
⑥ 型 行 動						

図11 概念明確化テスト例

1. お互いの意思疎通の過程で、特に大切なことは

- a. 迅速に結論を出すように努力すること。
- b. お互いの間の緊張を避けること。
- c. お互いの考えや言葉の内容に筋を通すこと。
- d. お互いの間に起る感情の相互作用に目を向けること。

個人	グループ	正解

2. 人が伝えようとするメッセージは、ふつう2つの要素がある。それは

- a. 伝えようとする内容と、その底にある感情や態度である。
- b. 仕事上のことと、私生活上のことである。
- c. 事実と、それに対する自分の意見である。
- d. 事実と、それに対する参考資料である。

--	--	--

3. 意志の疎通は

- a. すべて言葉によって行なわれる。
- b. 言葉以外に、文書や記号によって行なわれる。
- c. 言葉以外に、表情、身ぶり、目くばりなどによっても行なわれる。
- d. 沈黙によって行なわれる。

--	--	--

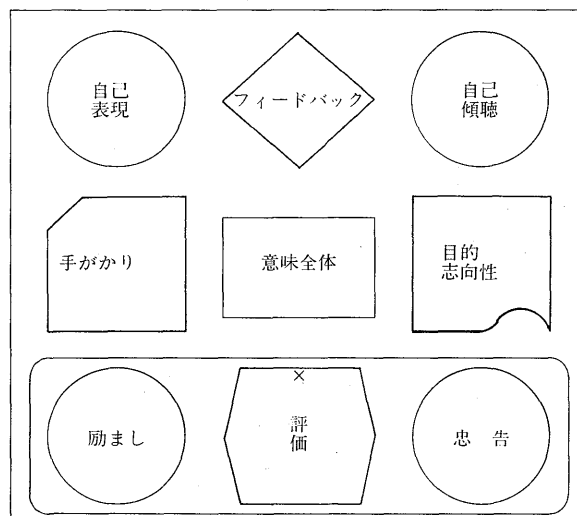
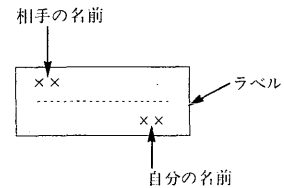


図12 フィードバック実習の進め方

(1) 相互行為の手順

- ① 他者の特徴と思うことを1人につき2点ずつ（1枚のラベルに1点ずつ）書く。
- ② 右隣の人がラベルを＜読みあげる＞
- ③ 実習役（受信者）が＜F Bする＞
- ④ 送り役（発信者）が＜判定する＞
 - 「ハイ」の場合→送り手が次へ交替
 - 「イイエ」の場合→再度② ③ ④
- ⑤ 再度「イイエ」の場合→送り役は「真意」をかみくだいて＜話してきかす＞
- ⑥ 実習役は話された言葉どおりに＜繰り返す＞
- ⑦ 送り役の「ハイ、そうです」で終る。



(2) フィードバック応答の形式

「つまり私は（あるいは私の何々が）……ということですね」

- 「ハイ、そうです」
- 「イイエ、
 - 「違います」
 - 「少し違います」

(3) 注意事項

○雑音を入れずに淡々と

- ・実習役は「そうだ」とか「そうでない」とか「前と同じですね」とかいいさい言わない。
- ・送り役は「失礼ですが」とか「前と同じ」とかいいさい言わない。

○F Bは 行動語で

具体場面を想定して、特徴をありありと描写してみる。

こんな時、こうする傾向がある

例、「協調性がある」←「つまり私は、

反論に出会うと、自分の意見を引込めて、簡単にみんなの
意見に同調する傾向がある、
ということですね。」

図13 自己像の解明ワークシート

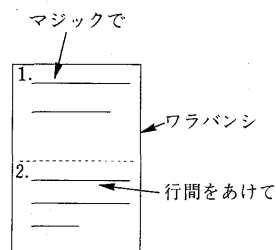
自分の名前		自 我 像 点 検 表		
		自我像	代表者	決 定
1	いつも誰とでも誠実に接する。			
2	自分で心を決め容易に変えないことが多い。			
3	ものごとを片づけるのに、誰かにしりを叩いてもらう必要を感じる。			
4	決断を下す責任をすすんで引き受ける。			
5	はっきりと援助を請われると、いちだんと成果をあげる。			
6	社会で認められた価値や基準はたいがい受け容れる。			
7	人と競争しなければならないような時、自信が持てないことが多い。			
8	人の意見を聞く前に自分の見解を発表することはしぶる。			
9	どちらかというと、注目の的になるよりもひかえめにしている方がいい。			
10	同じような職についている人と比べて、自分の技能や能力は平均より上だと信ずる。			
11	人が自分をどう思っているか気にかかることが多い。			
12	人からほめられると居心地が悪くなる。			
13	人を困惑させたり傷つけるようなことになっても、必要とあれば率直な意見を述べる。			
14	援助や指導を求めて、人が自分を頼ってくるのを好む。			
15	提案を人に受け容れさせるのに苦労する。			
16	人を見る際に偏見におちいらないように慎重を期す。			
17	慎重にものごとを計画して、その計画どおりに実行していくのを好む。			
18	健康のことが気にかかることが多い。			
19	企画を進めていくうえで、どちらかというと、人と責任を分かち合うよりも、自分が全責任を持つ方がいい。			
20	たいかいの場合、新しい状況でも自発的に発言する。			
21	人を怒らせたり、いらだたせたりすることがよくある。			
22	批判するのにユーモアを使う。			
23	腹が立った時には、どちらかというと、そのことで自分の考えを述べるよりも、話題を変える方がいい。			
24	人から批判されると居心地が悪くなる。			
25	どちらかというと、自分で決めてやるよりも、人が決めたことをやる方がいい。			
26	自分の考えを実行に移す前に、人から確かめてもらう必要を感じる。			
27	重要な論争点について不賛成の意思をはっきり示すことを避ける。			
28	個人的な問題は、どちらかというと人に相談するよりも、自分だけで解決する方がいい。			
29	完了するまでは、一つの事をやっていたい。			
30	感情をコントロールできる。			
31	対人関係で、かなりの暖かさと親近感を示す。			
32	人の感情を傷つけることを避ける。			

図14 自己育成の進め方

(1) 育成目標 作成

「四つの窓」と「新自己像」をよく検討して、今後半年から1年先の自分をどんなふう to 育てたいかを考えて、第1、第2目標を書く。

文は { ~できる
~しない
~する } ようになっていたい、で終える。



(2) 自己育成の話し合い録音のステップ

A 面
(15分)

1. 本人によるプレゼンテーション
(7~8分)

- ・四つの窓
- ・自己像
- ・育成目標(2枚)
- ・主なものを読む
- ・全部読む

2. 全員による育成目標の検討

- ・全面的OK
- ・一枚に統合
- ・部分修正
- ・目標の変更

B 面
(15分)

主として メンバー による育成方法の助言

- ・具体的に
- ・いろいろな角度から
- ・実行できそうな

(3) フォローアップ

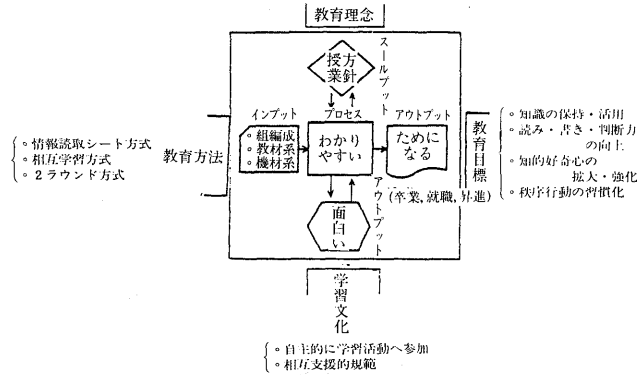
およそ1年後、再び集まって、別紙「自己育成目標の経過」をもとに話し合う。

図15 多人数教育における行動科学的試行

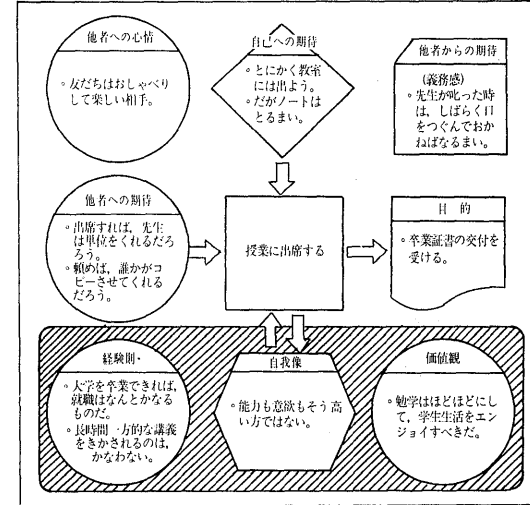
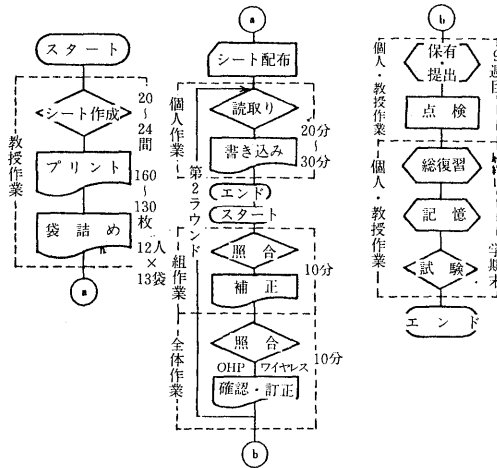
授業場面における学生の認知構造分析

授業構想の全体イメージ

- ・教育は(教授-学生)(大学-家庭)のくまの行動
- ・学習の基本原則は「learning by doing」
- ・教育内容は「時代感覚」と「永遠感覚」の交差する所



授業のプロセスチャート



望ましい認知構造

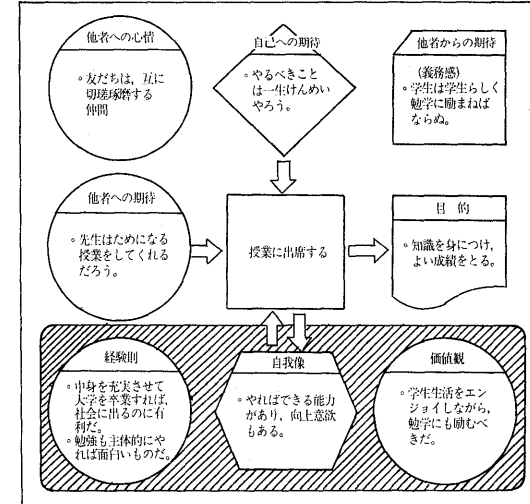


図16 経営・組織体質強化への組織開発アプローチ

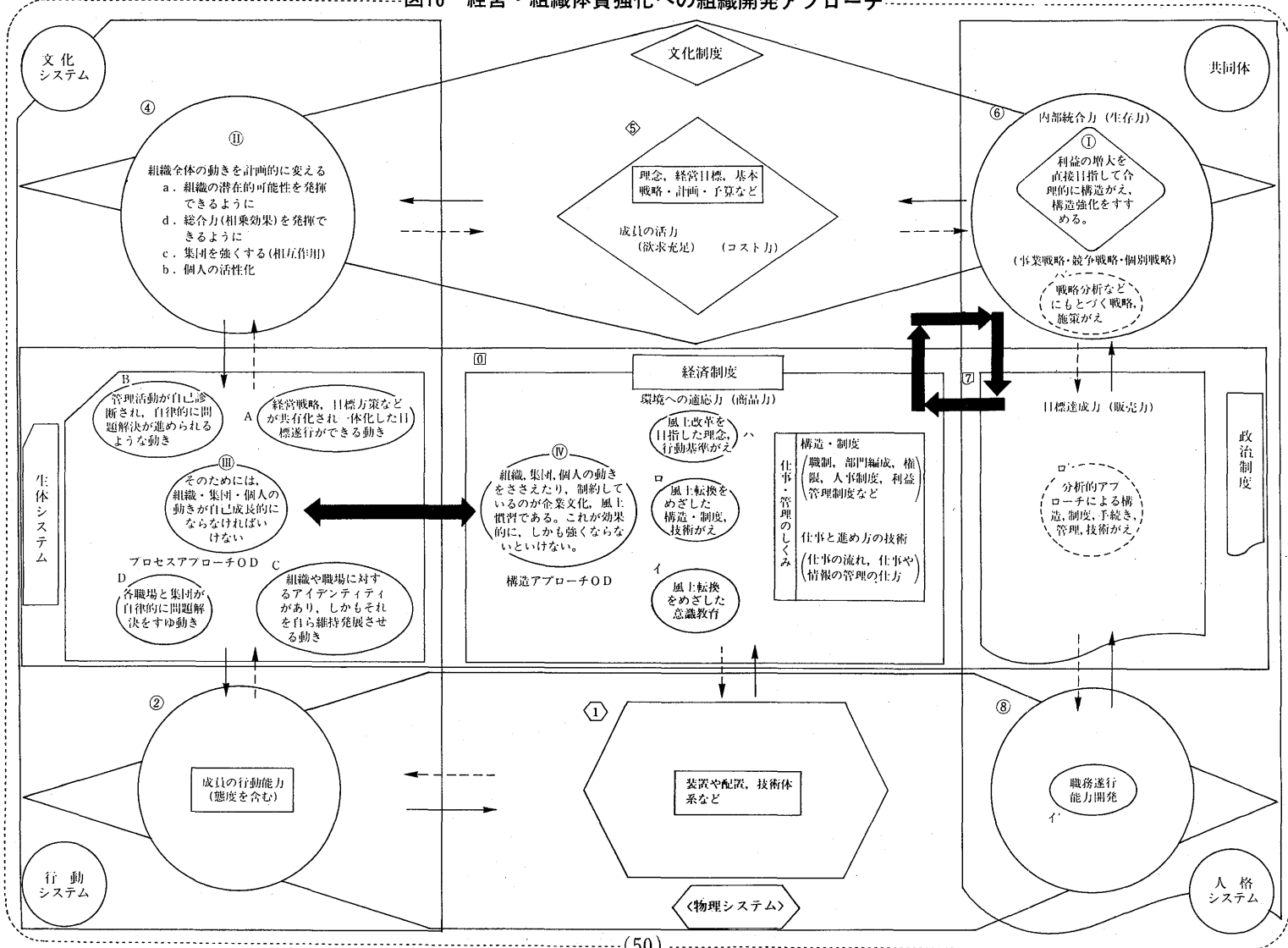
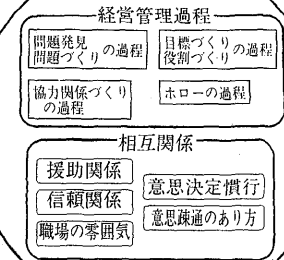


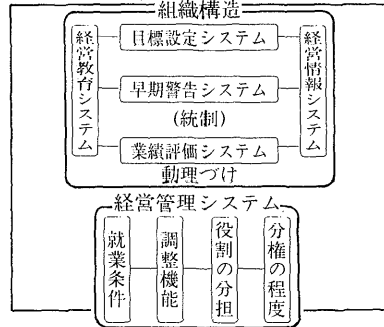
図17 職場情况の解明図式

職場集団の文化風土要因



- | | |
|------------|--------------|
| V | II |
| 27 援助的職場風土 | 6 目標展開 |
| 28 上下間の援助 | 7 ヨコ目標展開(他部) |
| 29 ヨコの援助 | 8 ヨコ情報入手(他部) |
| 30 職場の一体感 | 9 職場目標展開 |
| 31 上下の信頼 | 10 統制データ有効性 |
| 32 ヨコの信頼 | 11 評価方式有効性 |

職場組織の制度構造要因



- IV
- 26 ヨコ意思疎通
 - 25 下意上達
 - 24 上意下達
 - 23 意思決定受入
 - 22 評価納得
 - 21 統制納得
 - 20 役割理解
 - 19 就業ルール納得

職場成員の職務能力要因

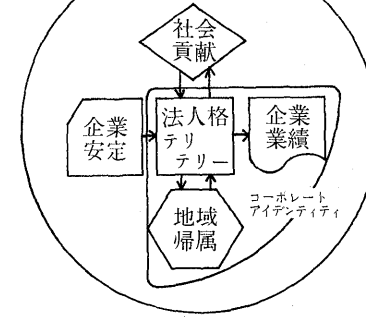
知識・情報

経験・技術

能力・情緒

- | | |
|-----------------|-----------|
| III | VI |
| 12 指揮命令の有効性 | 33 成長満足 |
| 13 個人の仕事分担 | 34 評価満足 |
| 14 ヨコ調整ルール | 35 仲間満足 |
| 15 ヨコ情報入手 | 36 仕事の安心感 |
| 16 個人目標明確 | 37 生活の安定感 |
| 17 中途チェックデータルール | |
| 18 評価による方向づけ | |

企業共同体の存在課題



- I
- 5 対外適応関心
 - 4 ヨコ役割意識
 - 3 タテ役割意識
 - 2 仕事一体感
 - 1 全体目標一体

社会成員の存在課題

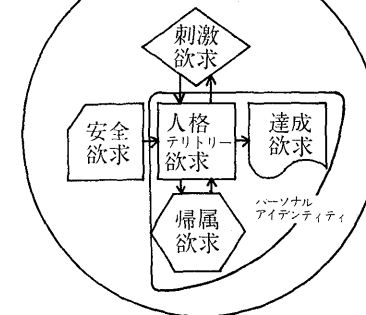


図18 職場状況のワークシート

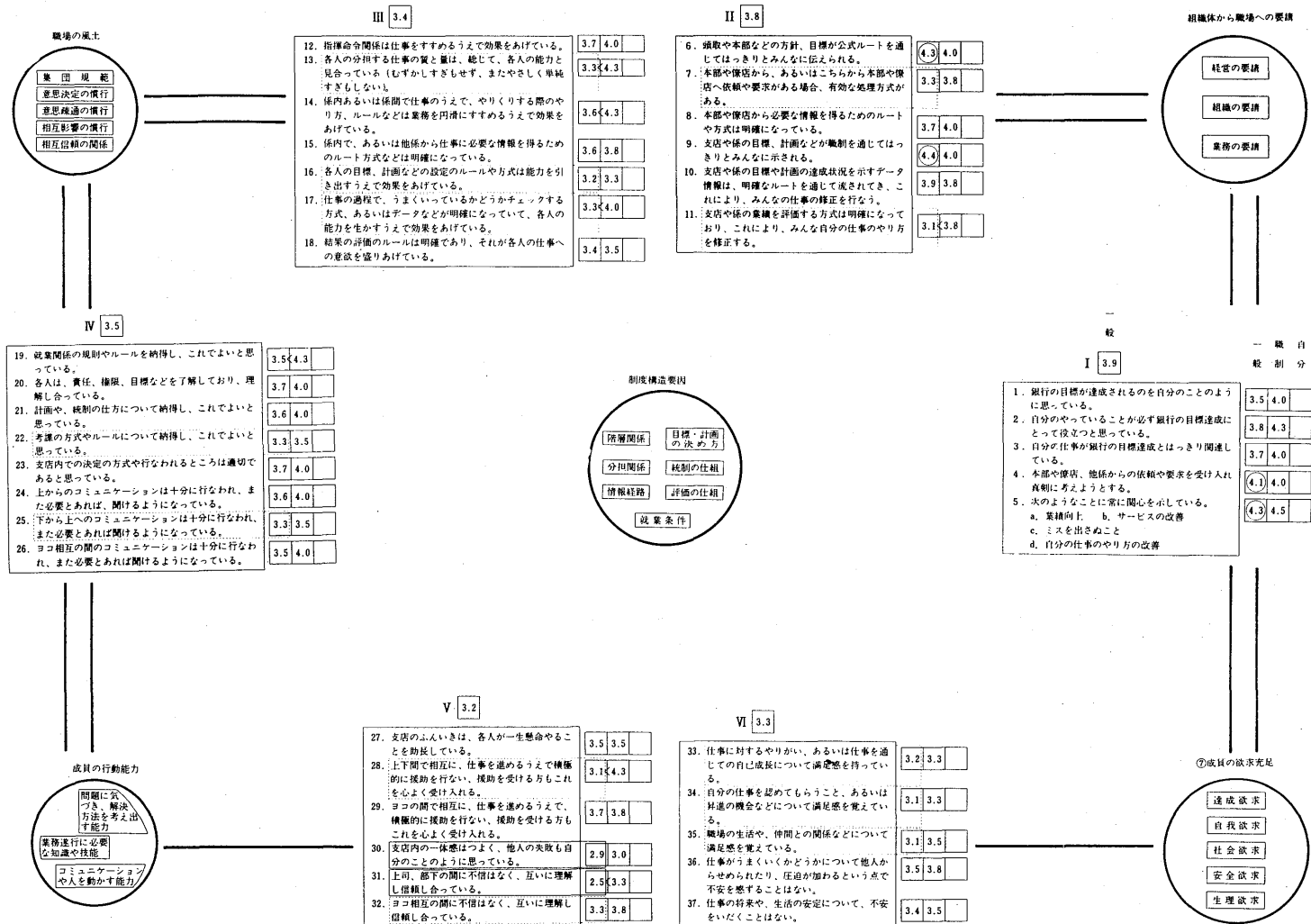
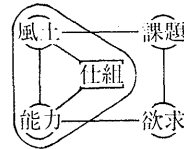


図19 日本の会社および地方銀行の支店情況のパターン分布

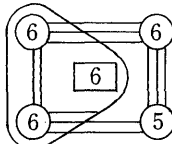


上 日本 (35社計237職場)
下 地銀 (63行計 83支店)
%は類型比率
()内は類型職場数

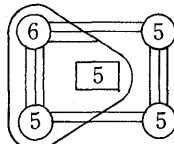
地方銀行の支店 情況のパターン分布

強みの多い
職場

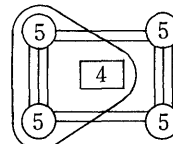
個別に発生する
問題をつぶすことで
改革できる



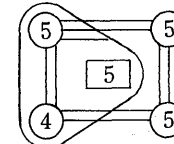
④ 動態活力型
3%(7)
4.8%(4)



⑤ 風土助長型 内部中心に
6%(13) まとまっている
9.6%(8)

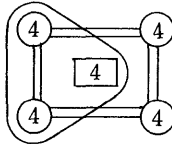


⑥ 相互扶助型 イキイキ行動
12%(28) している
9.6%(8)

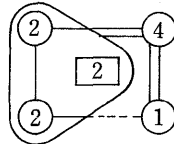


⑦ 仕組み支持型
2%(4)
3.6%(3)

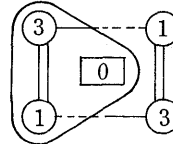
強み・弱み
相半の職場



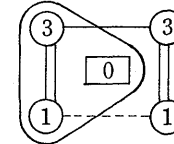
⑧ 難問回避型 一応の問題は
40%(96) こなせる
51.8%(43) →教育路線
(問題意識の高揚)



⑨ 内部不安定型 内側のどこかに
3%(7) 原因がある
2.4%(2) (この型は増加の傾向)
→参画体制をつくっていく

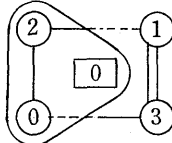


⑩ 外部不適應型
5%(12) 専門家集団に多い
0%(0) →教育路線→仕組み路線
(身近なものから)

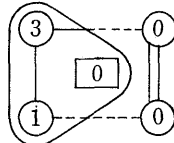


⑪ 能力仕組みアン 急成長の企業
バランス型 →仕組み路線
10%(24) または
8%(6) 教育路線

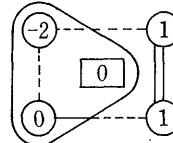
弱みの多い
職場



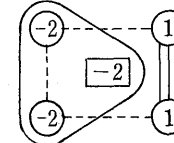
⑫ 機能不全型 管理職のマネジメント不足
5%(13)
0%(0) メンバーとの←教育, マネジメントの強化→仕組みの整備
関係づくり



⑬ マネジメント不在型



⑭ 風土反発型 風土が弱い
3%(7) ⑮に圧力が加わると
0%(0) こうなる
→強みである仕組み, 能力に
手を打って風土にせる
仕組み→風土



⑯ システムせい弱型
3%(7)
3.6%(3) からまわり
どこから手を打っても
いい
風土→仕組み能力

⑳ その他
0%(0)
6.6%(6)

図20 職場診断構造機能マトリックス

因子 要因関連 機能		第4因子	第1因子		第3因子	第2因子	第5因子
		組織への帰属感	職場の経営管理システムの有効性		職場運営の納得性	職場の人間関係の円滑さ	上下間の疎通性
		I 職務課題—経営課題	II 経営課題—管理システム	III 管理システム—職務能力	IV 管理システム—職場風土	V 職場風土—職務能力	VI 職務遂行—職務課題
目標計画		2. 自分の仕事の組織への貢献意識 3. 自分の仕事と組織目標との関係についての理解 5. 業績、仕事の効率化等への関心度	6. トップの方針、目標の伝わり方 9. 職場への目標計画のブレイクダウン	13. メンバーの能力に見合った仕事の質と量の分担 16. 各メンバーの目標設定の明確度	20. 各メンバーの目標や役割などの理解度 23. 職場での決定のやり方、レベルについての受け入れ度 21. 職場での計画や仕事の進め方に関する納得度		33. 仕事を通じての自己成長に関する満足度
統制			10. 行動修正できるデータ、情報の明確さ 11. 行動修正できる明確な評価方式	12. 職場の指揮、命令の有効性 17. 仕事を進めていくうえでの効果的なチェック 18. 仕事の結果に関する評価データの明確度とその方向づけ 14. 仕事を調整する際のルール、やり方の明確度	24. 上から下へのコミュニケーション 25. 下から上へのコミュニケーション 23. 職場での決定のやり方、レベルについての受け入れ度 19. 職場での就業関係の規則やルールに関する納得度	28. 上下間の援助関係	36. 仕事の過程で相互作用を受けることによる安心度
評価				17. 仕事を進めていくうえでの効果的なチェック 18. 仕事の結果に関する評価データの明確度とその方向づけ	21. 職場での計画や仕事の進め方に関する納得度 22. 職場での評価方式等についての納得度	31. 上下間の信頼関係	34. 評価制度への満足度
コミュニケーション	職場内			14. 仕事を調整する際のルール、やり方の明確度 15. 仕事を進めていくうえに必要な情報入手	26. メンバー相互のコミュニケーション	32. メンバー相互の信頼関係 29. メンバー相互の援助関係	35. 職場の生活や仲間との関係での満足度
	部門間	4. 他部門からの要請の受けとめへの関心度	7. 他部門との間に要求、苦情をフィードバックできるルートの明確さ 8. 情報ルートの明確さ	14. 仕事を調整する際のルール、やり方の明確度 15. 仕事を進めていくうえに必要な情報入手			
経営参加意識		1. 自分と組織との一体感 2. 自分の仕事の組織への貢献意識 3. 自分の仕事の組織目標との関係についての理解			20. 各メンバーの目標や役割などの理解度	27. メンバーの能力発揮をうながす職場の雰囲気 30. メンバーと職場との一体感	37. 仕事の将来や生活の安定に関する満足度

図21 職場情况説明のためのアンケート

アンケートのお願い（無記名）

このアンケートは、職場の現状を把握するうえで必要な基礎資料を得るためのものです。

あなたの立場だけを考えずに、あなたも含めた支店の現状を全体的にみて感じたままを記入してください。

（記入は、各項目の尺度の数字を○印で囲む）

ココカラ



Ⅲ 次の点について支店ではどうですか

12. 指揮命令関係は仕事をすすめるうえで効果をあげている。
13. 各人の分担する仕事の質と量は、総じて、各人の能力と見合っている（むずかしすぎもせず、またやさしく単純すぎもしない）。
14. 係内あるいは係間で仕事のうえで、やりくりする際のやり方、ルールなどは業務を円滑にすすめるうえで効果をあげている。
15. 係内で、あるいは他係から仕事に必要な情報を得るためのルート方式などは明確になっている。
16. 各人の目標、計画などの設定のルールや方式は能力を引き出すうえで効果をあげている。
17. 仕事の過程で、うまくいっているかどうかチェックする方式、あるいはデータなどが明確になっていて、各人の能力を生かすうえで効果をあげている。
18. 結果の評価のルールは明確であり、それが各人の仕事への意欲を盛りあげている。

その おり	ど も ち い ら ぬ	ま ち つ が た う		
5	4	3	2	1
5	4	3	2	1
5	4	3	2	1
5	4	3	2	1
5	4	3	2	1
5	4	3	2	1
5	4	3	2	1
5	4	3	2	1

Ⅳ 次の点について支店の人達は総じてどうですか

19. 就業関係の規則やルールを納得し、これでよいと思っている。
20. 各人は、責任、権限、目標などを了解しており、理解し合っている。
21. 計画や、統制の仕方について納得し、これでよいと思っている。
22. 考課の方式やルールについて納得し、これでよいと思っている。
23. 支店内での決定の方式や行なわれるところは適切であると思っている。
24. 上からのコミュニケーションは十分に行なわれ、また必要とあれば聞けるようになっている。
25. 下から上へのコミュニケーションは十分に行なわれ、また必要とあれば聞けるようになっている。
26. ヨコ相互の間のコミュニケーションは十分に行なわれ、また必要とあれば聞けるようになっている。

その おり	ど も ち い ら ぬ	ま ち つ が た う		
5	4	3	2	1
5	4	3	2	1
5	4	3	2	1
5	4	3	2	1
5	4	3	2	1
5	4	3	2	1
5	4	3	2	1
5	4	3	2	1

Ⅴ 次の点について総じてどうですか

27. 支店のふんいきは、各人が一生懸命やれることを助長している。
28. 上下間で相互に、仕事を進めるうえで積極的に援助を行ない、援助を受ける方もこれを心よく受け入れる。
29. ヨコの間で相互に、仕事を進めるうえで、積極的に援助を行ない、援助を受ける方もこれを心よく受け入れる。
30. 支店内の一体感はずよく、他人の失敗も自分のことのように思っている。
31. 上司、部下の間に不信はなく、互いに理解し信頼し合っている。
32. ヨコ相互の間に不信はなく、互いに理解し信頼し合っている。

その おり	ど も ち い ら ぬ	ま ち つ が た う		
5	4	3	2	1
5	4	3	2	1
5	4	3	2	1
5	4	3	2	1
5	4	3	2	1
5	4	3	2	1

Ⅵ 支店の人達は総じてどのように思っていますか

33. 仕事に対するやりがい、あるいは仕事を通じての自己成長について満足感を持っている。
34. 自分の仕事を認めてもらうこと、あるいは昇進の機会などについて満足感を覚えている。
35. 職場の生活や、仲間との関係などについて満足感を覚えている。
36. 仕事がかくいくかどうかについて他人から攻められたり、圧迫が加わるという点で不安を感じることはない。
37. 仕事の将来や、生活の安定について、不安をいだくことはない。

その おり	ど も ち い ら ぬ	ま ち つ が た う		
5	4	3	2	1
5	4	3	2	1
5	4	3	2	1
5	4	3	2	1
5	4	3	2	1

Ⅶ 次の点についてどう思いますか

6. 頭取や本部などの方針、目標が公式ルートを通じてはっきりとみんなに伝えられる。
7. 本部や僚店から、あるいはこちらから本部や僚店へ依頼や要求がある場合、有効な処理方式がある。
8. 本部や僚店から必要な情報を得るためのルートや方式は明確になっている。
9. 支店や係の目標、計画などが職制を通じてはっきりとみんなに示される。
10. 支店や係の目標や計画の達成状況を示すデータ情報は、明確なルートを通じて流れてきて、これにより、みんな仕事の修正を行なう。
11. 支店や係の業績を評価する方式は明確になっており、これにより、みんな自分の仕事のやり方を修正する。

その おり	ど も ち い ら ぬ	ま ち つ が た う		
5	4	3	2	1
5	4	3	2	1
5	4	3	2	1
5	4	3	2	1
5	4	3	2	1
5	4	3	2	1

Ⅷ 支店の人達は総じてどうですか

1. 銀行の目標が達成されるのを自分のことのように思っている。
2. 自分のやっていることが必ず銀行の目標達成にとって役立つと思っている。
3. 自分の仕事が銀行の目標達成とはっきり関連している。
4. 本部や僚店、他係からの依頼や要求を受け入れ、真剣に考えようとする。
5. 次のようなことに常に関心を示している。
 - a. 業績向上
 - b. サービスの改善
 - c. ミスを出さぬこと
 - d. 自分の仕事のやり方の改善

その おり	ど も ち い ら ぬ	ま ち つ が た う		
5	4	3	2	1
5	4	3	2	1
5	4	3	2	1
5	4	3	2	1
5	4	3	2	1

図22 職場の体質強化方法

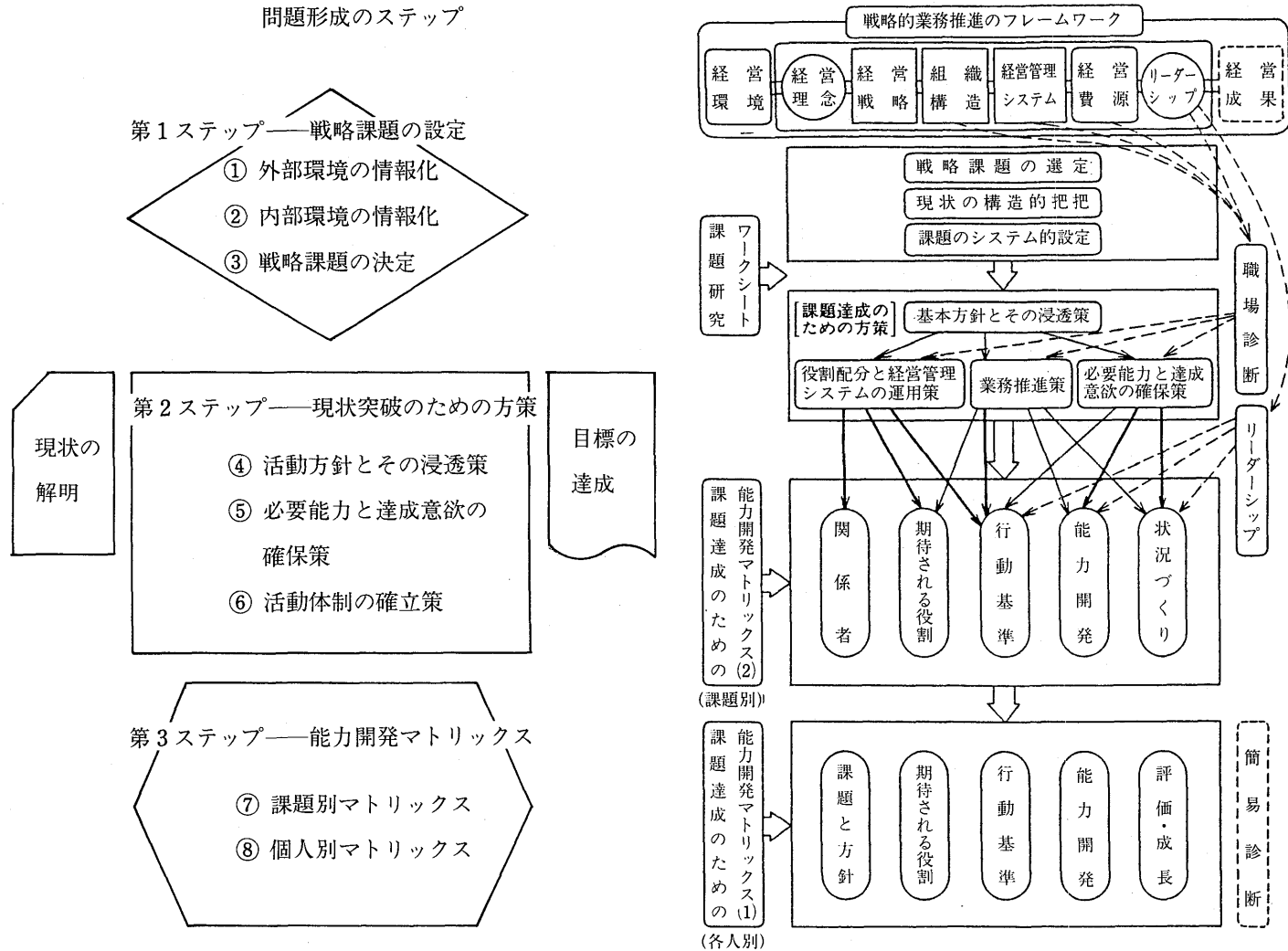


図23 B支店の職場情況の解明事例

㊤店内の情況

1.業務推進の管理システム—
毎月1回の定例会議とその都度のブロック会議での検討。
行動計画の立案と日誌による毎日の反省。
重要課題の日、週、月毎の検討。
店内表彰制度の活用。

2.行員の職務遂行能力—
次長
支店長とのコンビも良く、理解力に優れ、行動力、管理能力有り。
代理
管理職としての意識に乏しく、企画力、行動力共能力的に相当劣る。
一般男子
理解力、行動力あり、まず普通より上位のレベルにある。
一般女子
リーダーは温和過ぎて店内の女子をまとめられない。
女子相互間に於ける不満が多い。
仕事面での充足度はまず普通。

3.職場の集団風土—
銀行のニーズと個人との心理的統合支店運営の仕組との結び付等比較的良好。
職場風土と行動能力および職場生活での欲求不満が多い。
ヨコの意思疎通、相互援助良くない。

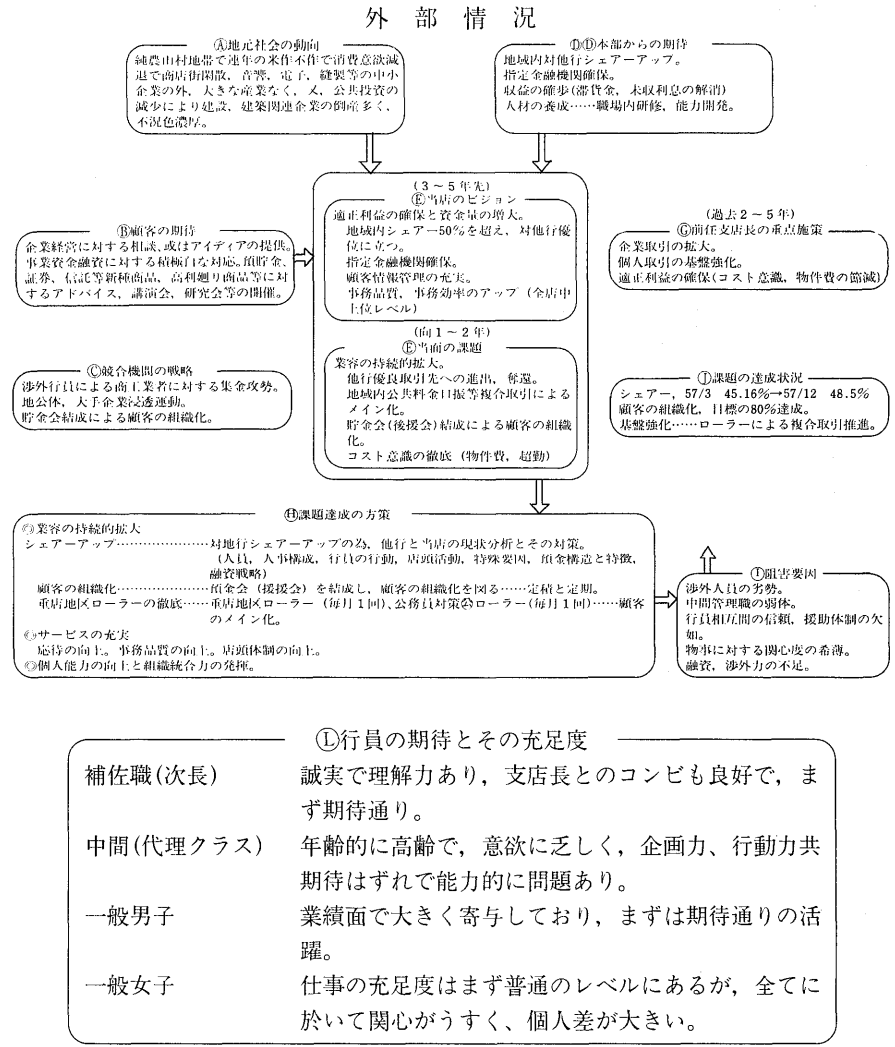
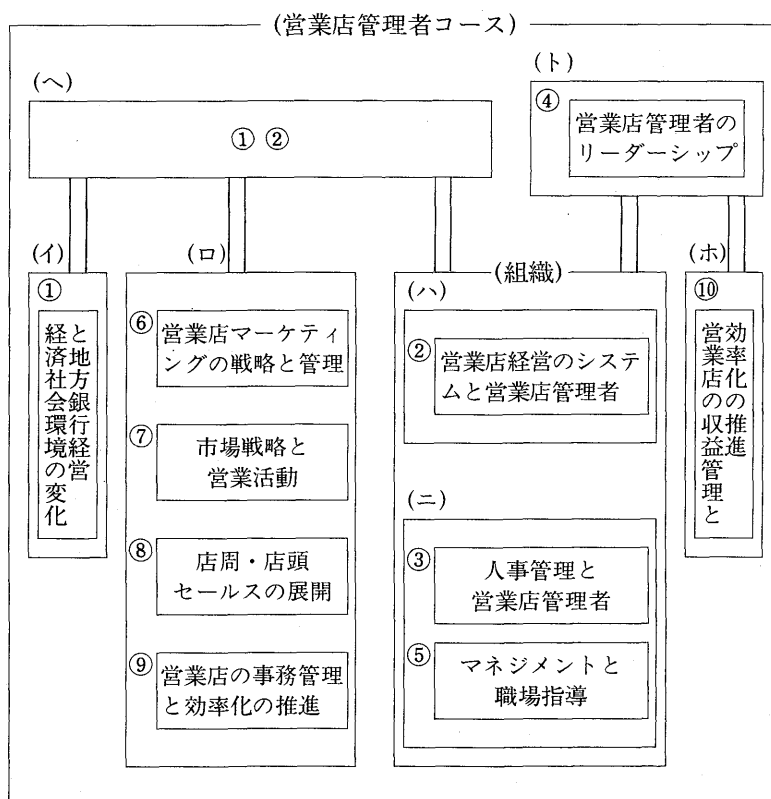
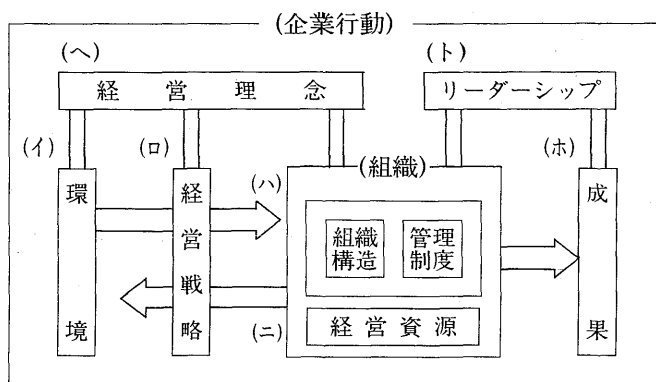


図24 営業店管理者通信講座



注) (イ)～(ト)は一般概念

①～⑩はテキスト分冊No.

図25 80年代を生きる日本人へのメッセージ

(アルビン トフラー)

「第三の波」を見つめて

なぜ、私は「第三の波」について語ろうとするのか？

- まず、激動する事象の本質を理解することから始めてみよう。
- 「不安定な世界」の只中で日本はいま、考えこんでしまっている。
- 農業革命、産業革命につぐ第三の革命の波が押しよせてきている。
- 第二波型社会のシステムは赤い旗の国であれ、白い旗の国であれ、結局は、同一のものである。
- 服従と反復訓練とが工業社会の教育システムの原則だったが……

世界はいま、どのような文明を求めているのか？

- 基準化と同時化、中央集権化と極大化、これらのすべては崩壊へとむかっている。
- 官僚機構・核家族－企業にふさわしい人間はその中でつくられてきた。
- “補助金”は底をついてしまった。いったい何が、起ころうとしているのか？
- エネルギーの多様化、生産過程の複雑化、革命の予感はいやおうなく高まっている。
- エレクトロニクス・パワーが交通戦争、通勤地獄を解消する日は近い。
- 家庭生活・都市構造、人間関係・社会組織－すべてが変わる！

「第三の波」をむかえる

新しい社会のカギとなるひとつの事実が、その姿をあらわした。

- 核家族はなくなる。かわって多様な家族形態が出現する。
- 自由な時間・自由な労働・創造性重視の教育システムへ。
- 企業最優先の時代は終った。第二波型意識の企業は淘汰されていく。

生活の価値基準を自分で創造する人々が、誕生しつつある。

- 第三波型人間の登場にとまどってはいけない。状況は変っているのだ。
- さまざまな局面で既存の制度が変革され多様化している。
- 先進的な第三波型国家へ。日本は世界の希望の星だ。

図26 文盲とは（ジョセフ バジール）

かつての文盲とは、読み書きのできない人を指した。
しかし現在の文盲とは、学ぶ術（すべ）を学ばない人である。
そして明日の文盲とは、創造する術を学ばない人である。

図27 成熟社会の相貌(経済企画庁)

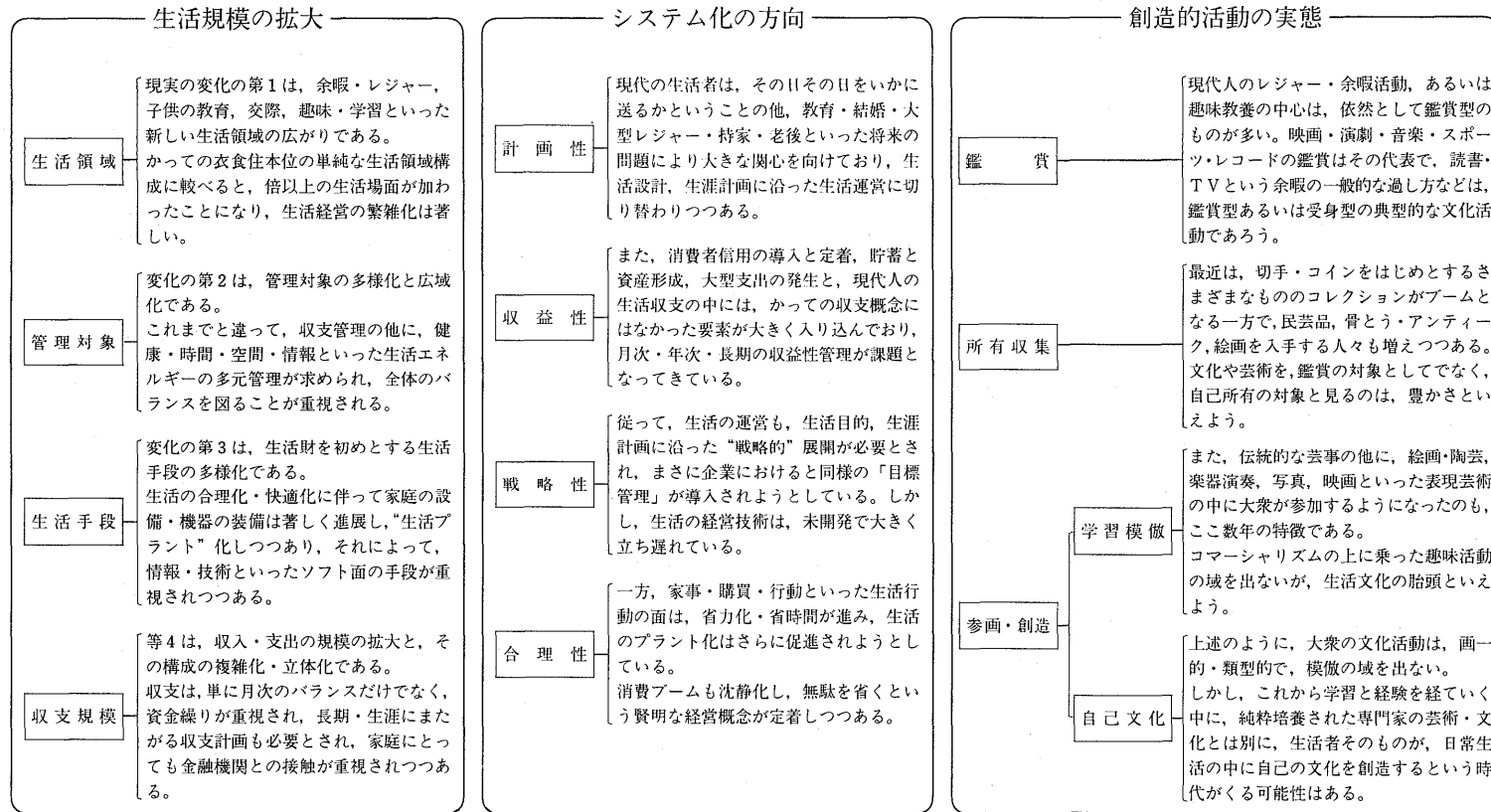


図28 家庭基盤に関する基本的考え方(経済企画庁)

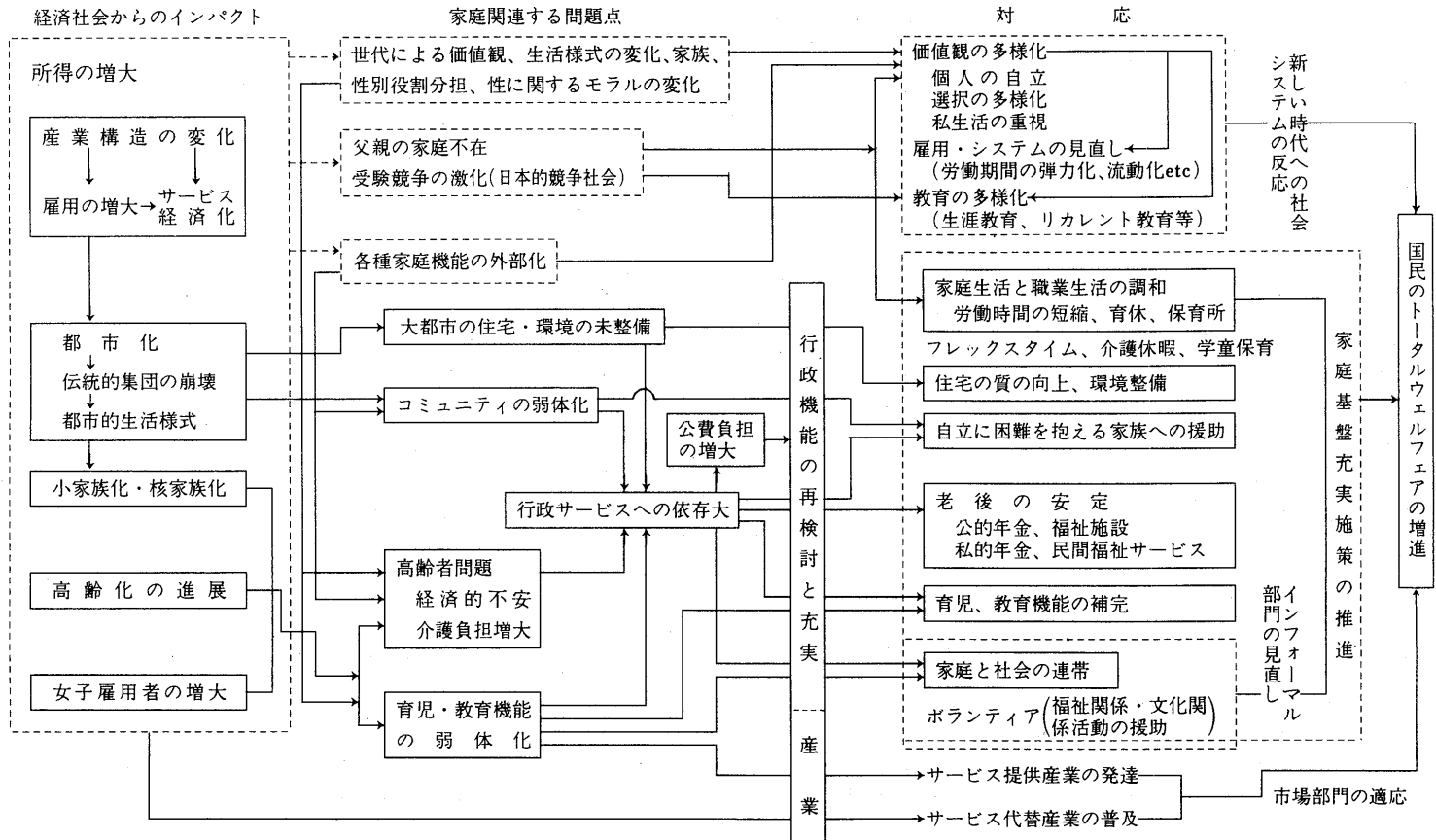


図29 まんだらの位置

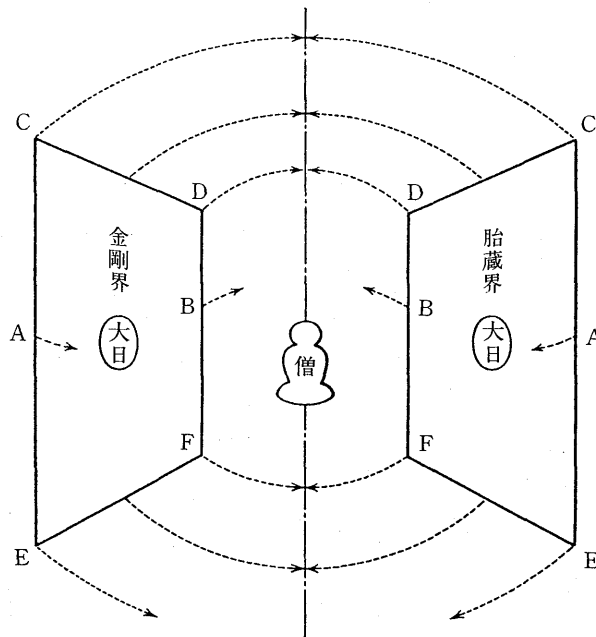
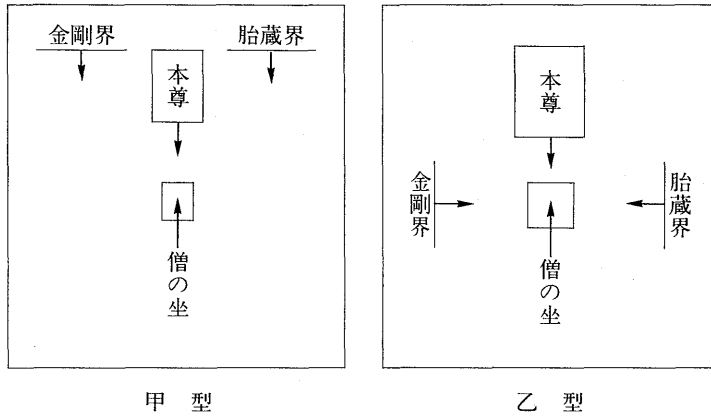
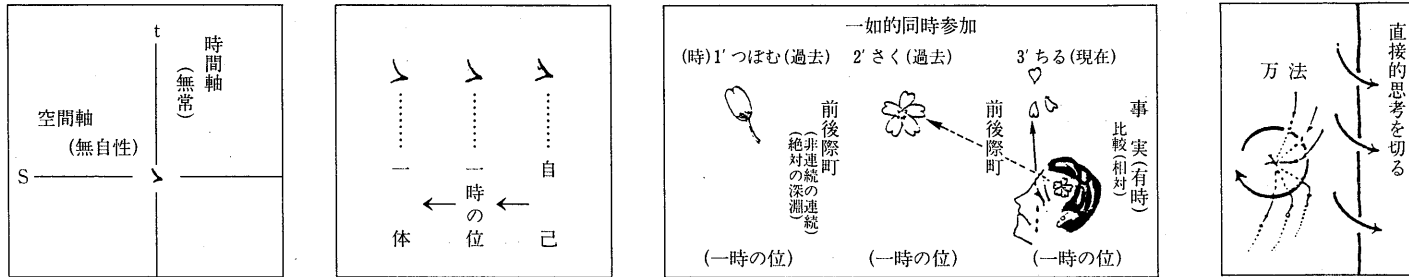


図30 道元禪の構造



文章で示すと

- (① あり……仏法)
 (② なし……仏性) >—< (④ しかも……世法)
 (③ あり……仏道)

記号で示すと

- (0 ⇌ 1) >—< ④
 (0 …… ② 無
 1 …… ①・③ 一体・一如)

図で示すと

- (①) >—< ④
 注 (② …… ②
 ③ …… ①・③)

※文章による解説だけでは、ともすれば混乱
 しがちな道元禪の構造を「流れ」と「関係」を
 図示することにより、読者の理解に資したい。

- ↓ は「流れ」を
 || は「等式関係」を
 >—< は「対立関係」を
 …… は「説明関係」を
 ⇌ および ⇔ は「相関関係」を

①②③が意味するもの

- ② 無 (無自主……関係, ここ
 無 常……流れ, いま)
 ↓
 ① 一体感 (万法と一体)
 ↓
 ③ 一如行 (一法と一如)

図31 正法眼蔵現成考案

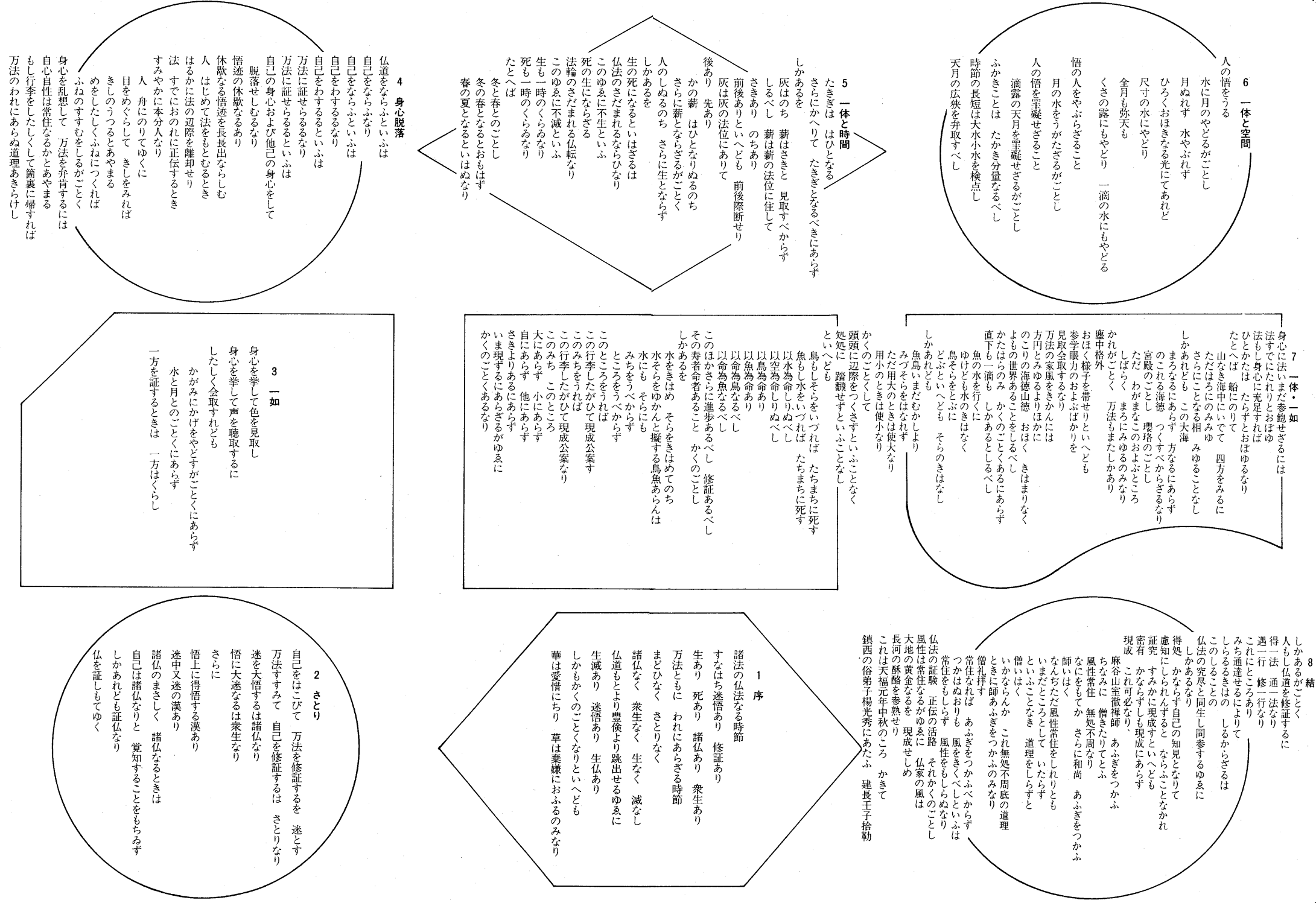
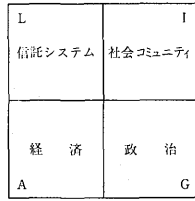
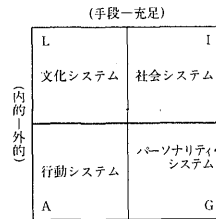


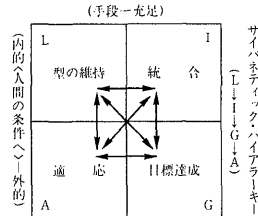
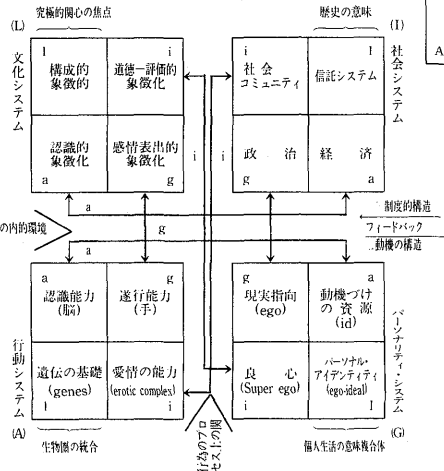
図32 社会システムの構造と変化



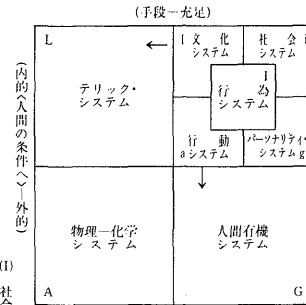
第1図 社会(society)の機能サブシステム



第3図 行為システム



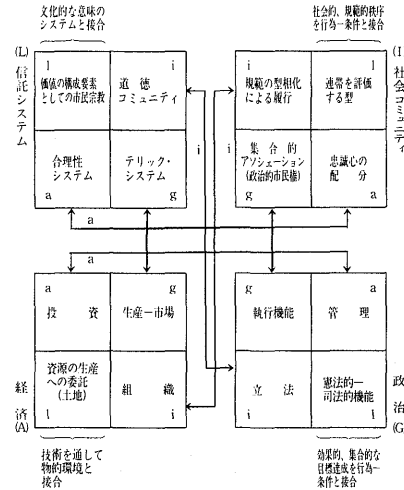
第2図 システムの四つの機能



第4図 人間の条件の一般的パラダイム

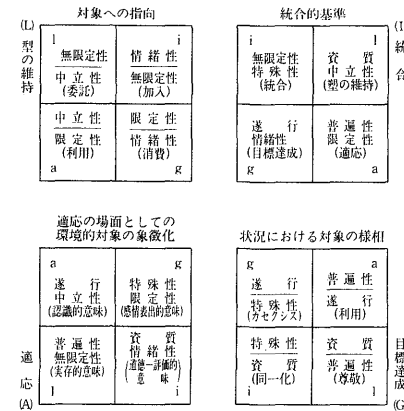
ルーマン	パーソンズ
社会システム	一般行為システム
貨幣権力 (A)	知徳 (G)
愛 (I)	影響力 (L)
良実 (L)	価値委託 (状況の定義)

第6図 一般化されたメディアの対比



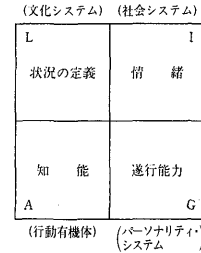
注 パーソンズ、プラト著『アメリカの大字』1973年、428頁参照。

第7図 社会システムの構造

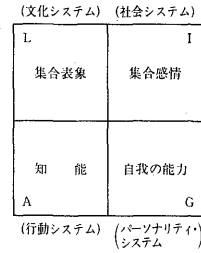


注 パーソンズ『社会学理論と近代社会』1967年、198頁参照

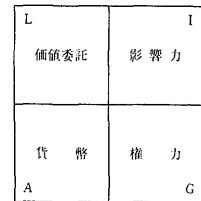
第8図 型の変数



第9図 行為システムのシンボリック・メディア (改訂される間)



第10図 行為システムのシンボリック・メセディア (改訂されたもの)



第11図 社会システムのシンボリック・メディア

図33 社会システム論

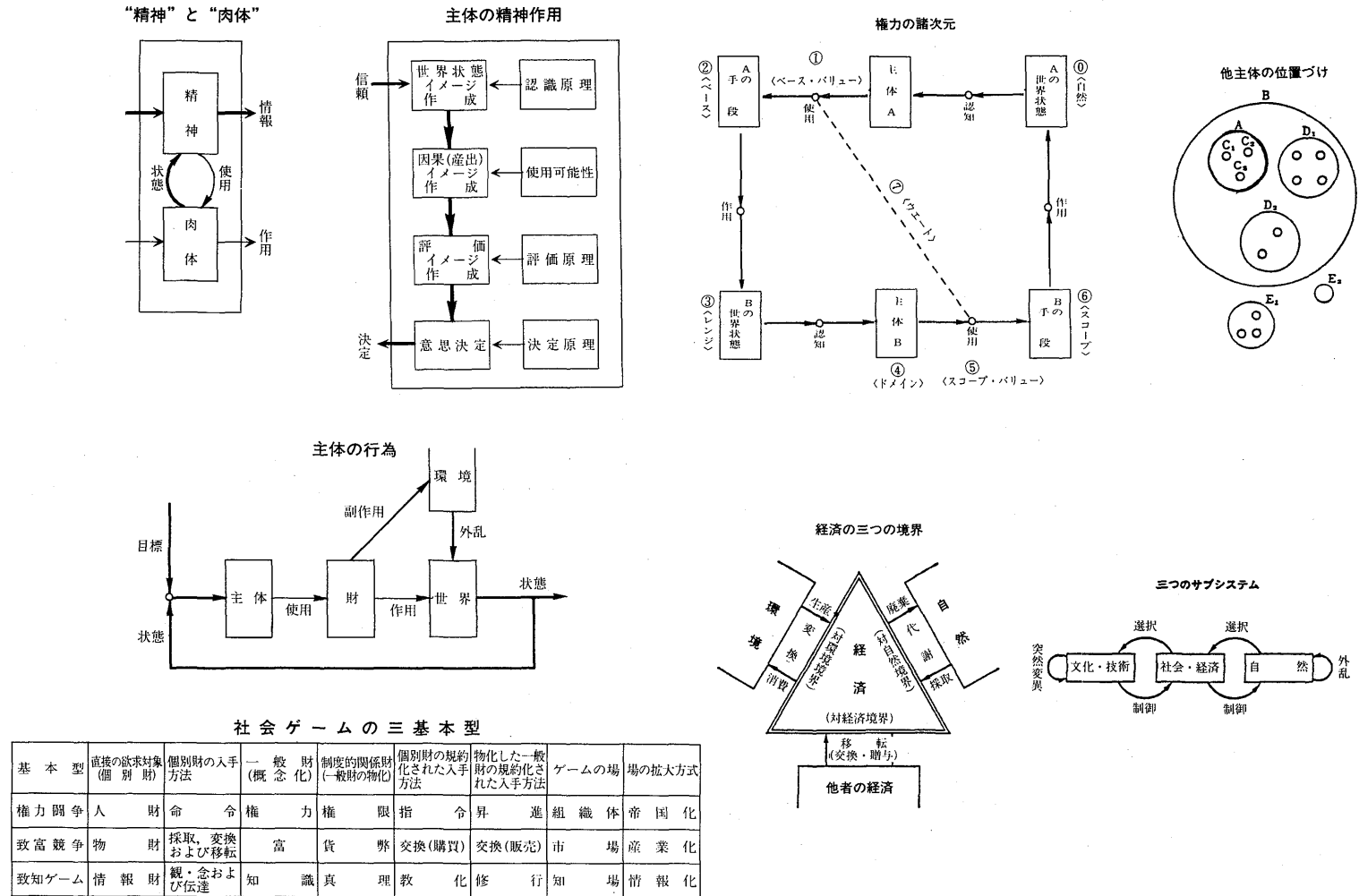


図34 文化のフェティシズムー1

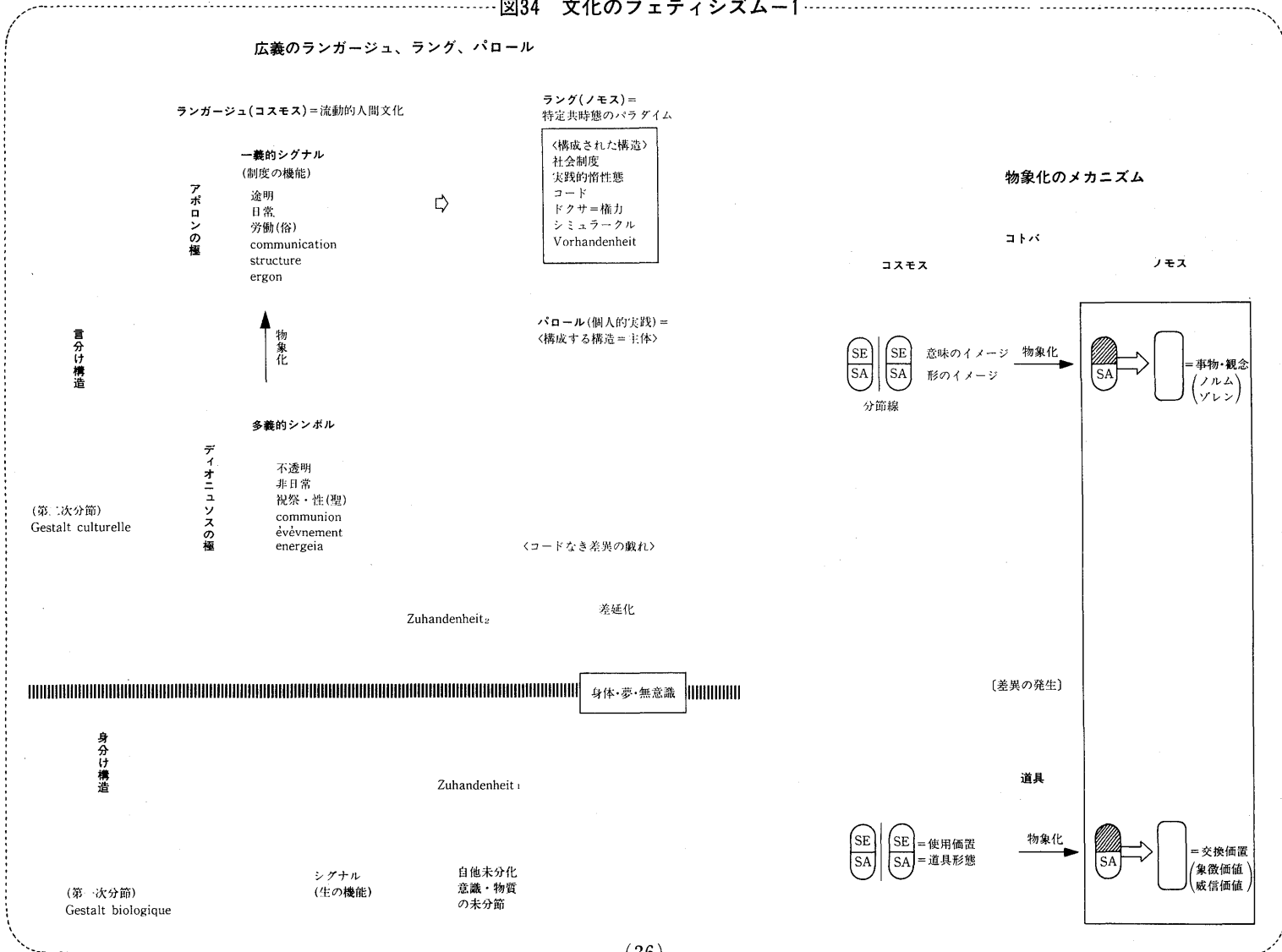
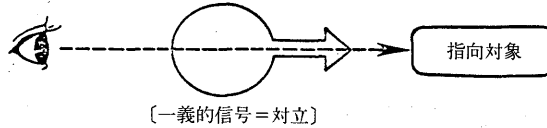


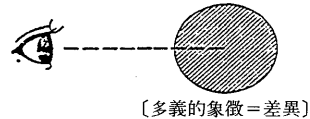
図35 文化のフェティシズム-2

透明と不透明

(1) 透明な指標 (ノモス内)



(2) 不透明な表現体 (コスモスの発生現場)

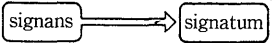
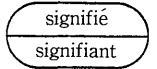


狭義のランゲージュ, ラング, パロール

- ① ランゲージュ { le langage = シンボル化能力 (puissance, faculté) } 「コトバ」
 { les langages = シンボル化活動 (action, activité)
- ② ラング { la langue = 記号体系 } 「言語」
 { les langues = 諸国語体
- ③ パロール { parole₁ = 既成の関係の物質化 (機械的音声化・文字化・曲の譜面化) } 「個人の言行為」
 { parole₂ = 新しい関係の樹立 (話す・書く・読む・作曲・演奏・鑑賞)

Déconstructionの五段階

4 指向対象の非在

- (1)  : <表象> représentation (ロゴスの再・現前)
- (2)  : <意義> signification (個の視点)
- (3)  : <価値体系> système de valeurs (共同主観性)
- (4) A/nonA : <否定的差異> différence négative (非実体性)
- (5)  : <動きつつある力> forces en mouvement (意味sensの発生)

シーニュとシーニュの影

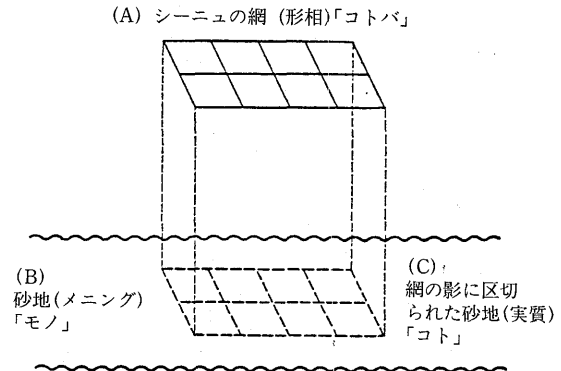


図36 記号論

文字の絵画化

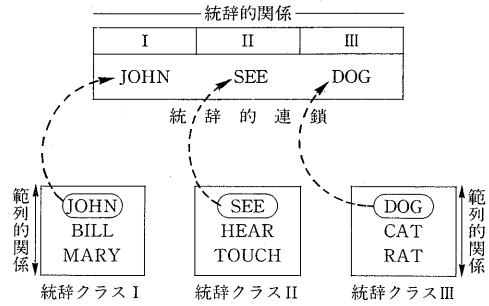


山中良二郎作

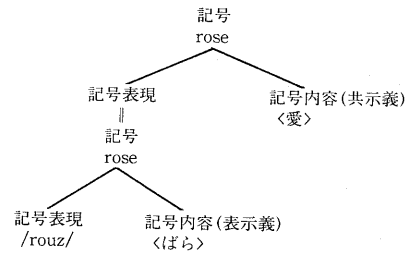
w w
 d i
 n n n
 i d i d
 w w

オイゲン・ゴムリンガー作

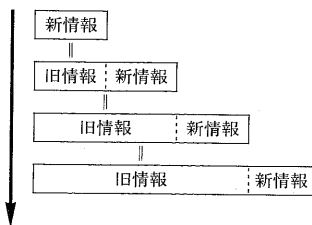
範列と統辞



表示義と共示義



情報の連続性



イデオム現象

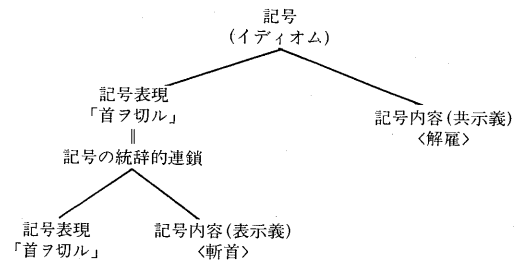
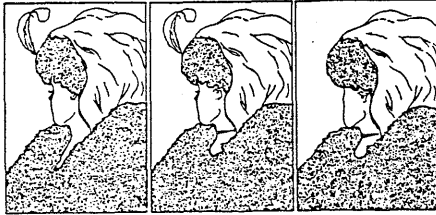


図37 イメージと人間

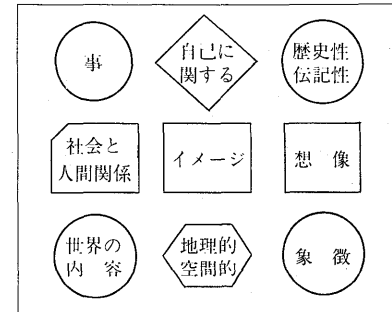
視点の取り方によって
形の意味が異なる



精神作用＝外界・知覚・イメージ

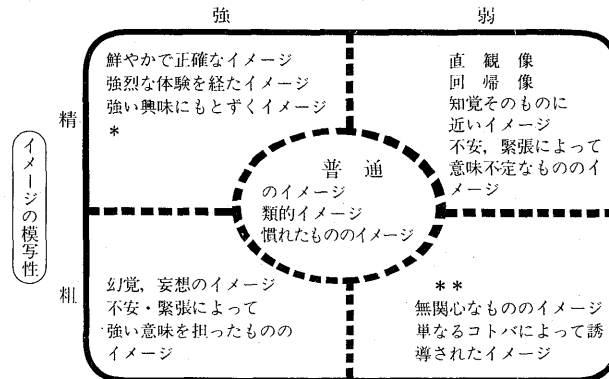
あらゆることがイメージである

F・外的世界、外界集合 G・知覚集合 H・内的世界、内界集合、イメージ界
F-G-H
Fは個体へ影響をおよぼす外界の要素の総体であり、Gは内界、外界についての知覚の総体である。Hは個体内部の個体が独自につくる世界であり、Gをとおしてつくられ、GをとおしてFに影響をおよぼすものである。



要素的イメージたちの位置づけ

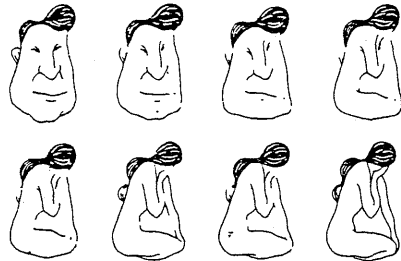
イメージの独自性



模写性が精であるほど、知覚に近くなるので、イメージは在外感を強くする。

独自性が強であるほど、イメージは心内定位という感じが強くなる。

双安定な認知の例



(男性の顔と女性の座像)。左上から右下に向かう過程で2つの相がすぐには入れ換わらず共存し履歴をもっている。
(Attneave, 1971).

* この位置のイメージを速くかつ豊富に表現する人は、頭がよいといわれやすい。

** この位置のイメージを多く表現する人は、頭が鈍いといわれやすい。

(想像心像や記憶心像などは、二面性のバランスに応じて、この平面のどこにでも位置しうる。)

(藤岡原図、藤岡1964を改訂)

図38 ホロンによる自己組織化

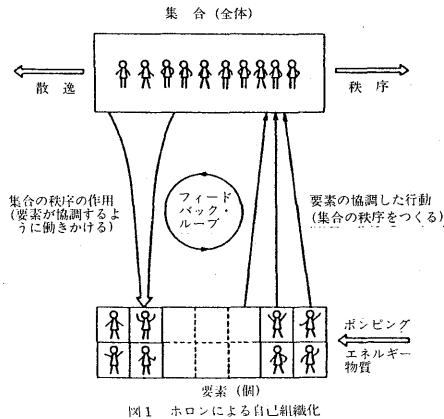


図39 フィードフォアードの4つの種類

第1の種類	従属的フィードフォアード	外部環境 → 生活主体	生活主体の側が外部環境に従属する形で自分をフィードフォアードしていく場合
第2の種類	統制的フィードフォアード	生活主体 → 外部環境	生活主体の側が外部環境をコントロールする形でフィードフォアードしていく場合
第3の種類	均衡的フィードフォアード	生活主体 ↔ 外部環境	生活主体と外部環境の力関係が均衡していて相互にフィードフォアードしていく場合
第4の種類	共動的フィードフォアード	生活主体 ↔ 外部環境	生活主体と外部環境が共通の目的に向かって協力し合ってフィードフォアードしていく場合

(43)

図40 影響力と権限

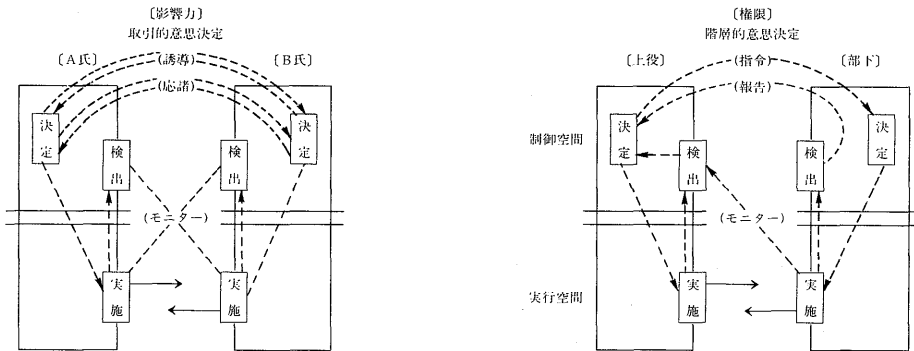
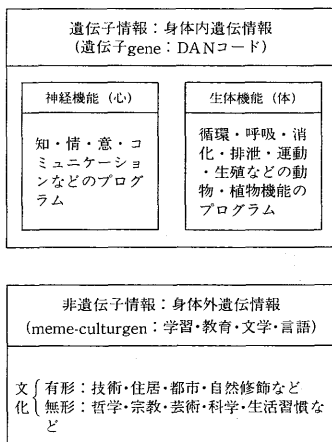
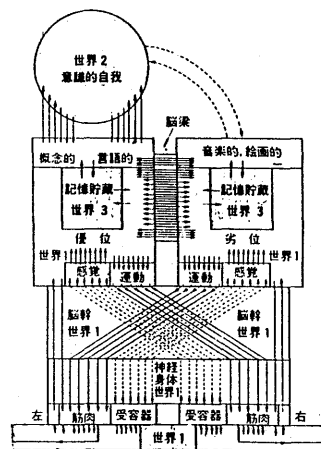


図41 新しい人間科学の立場



機械論、情報論、システム論、生物学、文化人類学などに基づき、これを統合して考える。

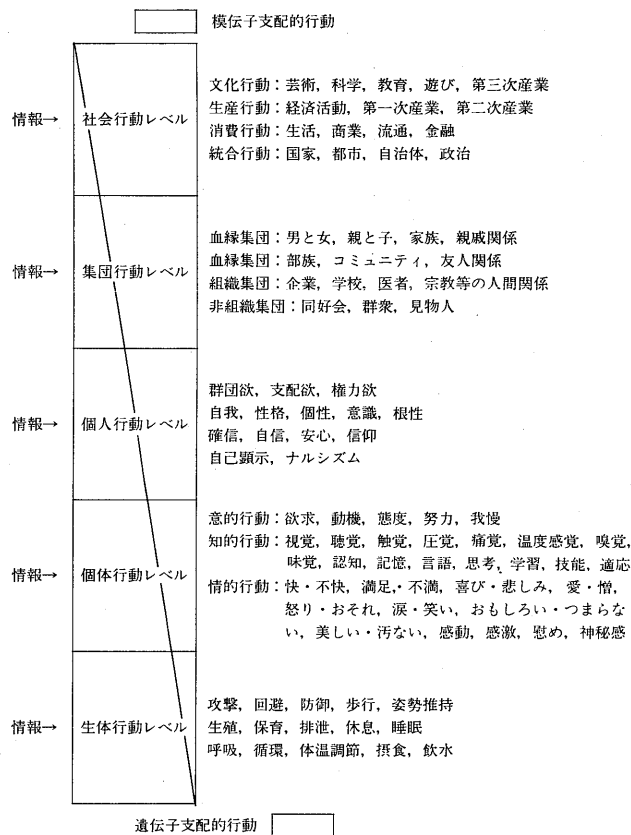
図42 半球間相互作用の方式



破線は体の末端の受容器から脳への主要連絡経路、実線は脳から筋肉への出力を示す。世界2である意識的自我は脳の限られた部分のみと情報をやりとりすることを示している (J・C・クルズ「脳」第2版、共立全書、1979より)

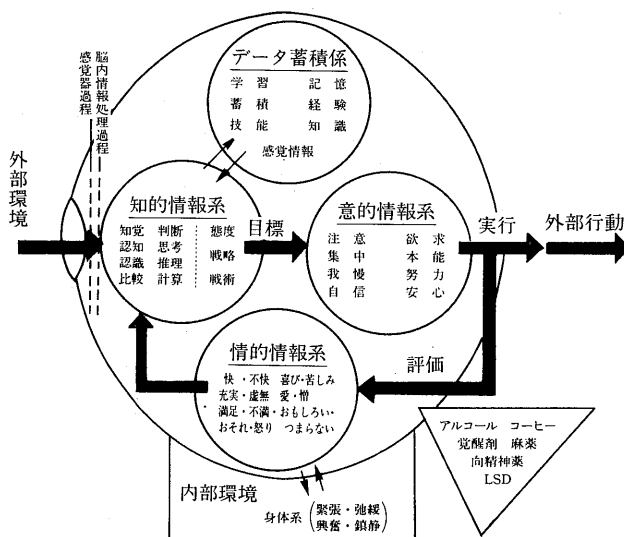
(44)

図43 人間行動の階層構造



(20)

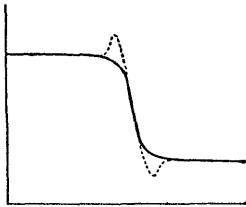
図44 情報代謝の経路



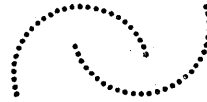
(20)

図45 認識とパターン

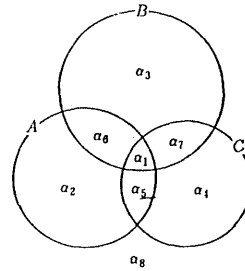
マッハ帯



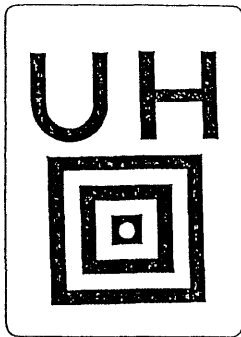
近親関係



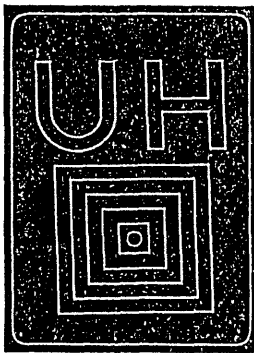
出発点になる述語



輪郭に関する発見



構造分析法にのっとる記述



1
2
3
4
5
6
7



(1110111)
+ H + V + V - H - V - V



(0010010)
+ V + V



(1011101)
+ H + V - H + V + H



(1011011)
+ H + V - H + H + V - H



(0111010)
+ V + H - V + V + V



(1101011)
- H + V + H + V - H



(1101111)
- H + V + V + H - V - H



(1010010)
+ H + V + V



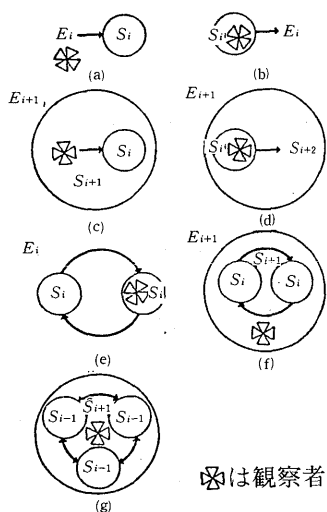
(1111111)
- V - H + V + V + H - V - H



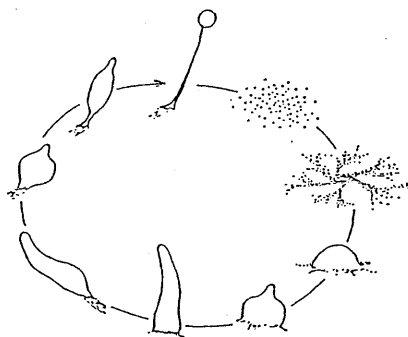
(1111011)
- H - V + H + V + V - H

図46 自己組織化

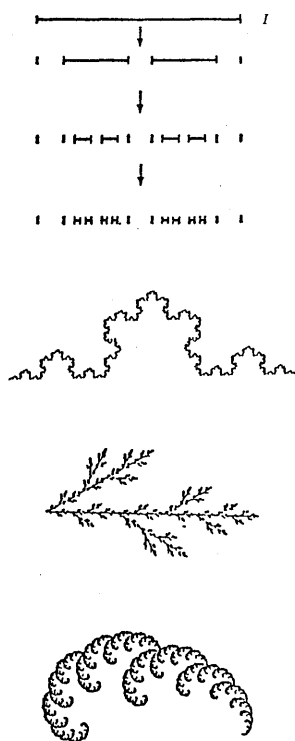
システムとオブザーバー



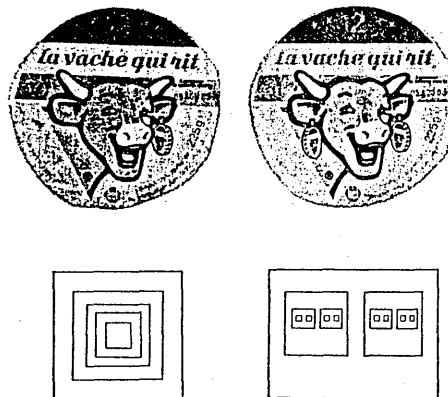
細胞性粘菌の生活史



フラクタル



自己相似



進化

縫合線の型の進化

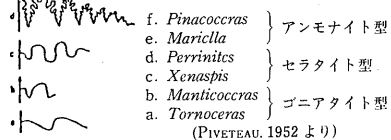
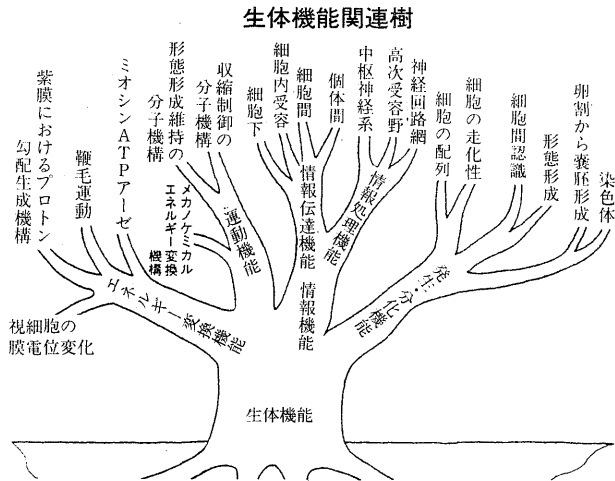
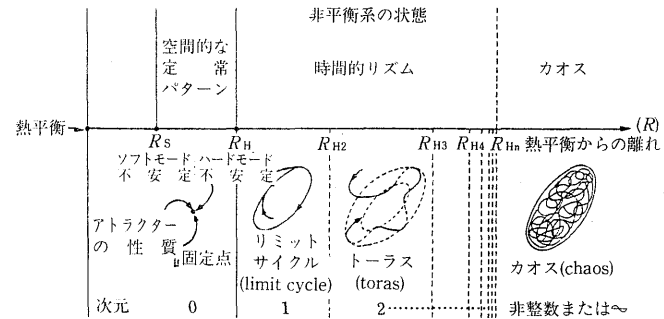


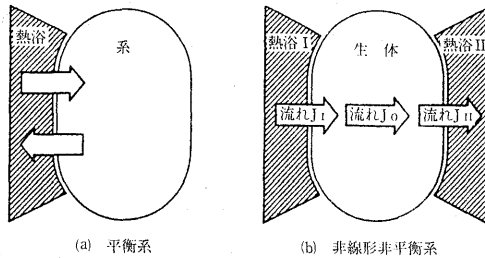
図47 生命現象のダイナミズム-1



熱平衡から系を離していったときにみられる状態

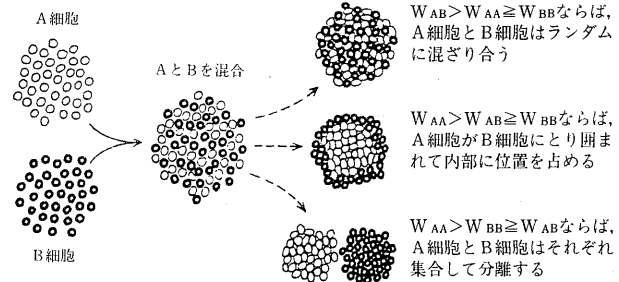


平衡系と非平衡系



生体系は少なくとも2つの異なる熱浴と同時に接する。このためどちらの環境とも平衡に達することができず、熱浴との間に物質またはエネルギーの流れ J_I 、および J_{II} ができる。これを非線形非平衡系という。この物質の流れを J_0 とすると、 $J_0 = J_I = J_{II}$ となったとき熱浴と生体のどこにも物質またはエネルギーの滞りが起きず、系は定常であるという。

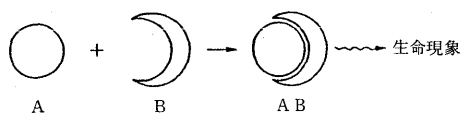
細胞の選別現象



2種類の細胞を無差別に混ぜ合わせても、1つの細胞集合体のなかで選別が起こる。このような現象は細胞間粘着力に量的な差があると仮定することによって説明できる。

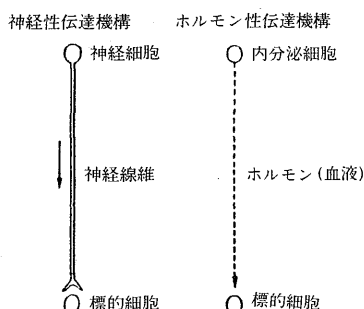
図48 生命現象のダイナミズム-2-

生命現象の物質的基盤

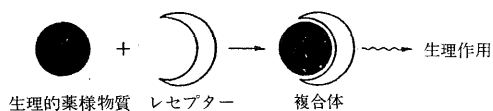
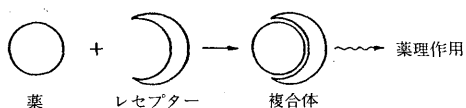


結合のないところに作用はない。生命現象の基盤には2つあるいは2つ以上の特異的な相互作用を示す物質がある（仮説）。

情報伝達系としての神経系とホルモン系のしくみの比較

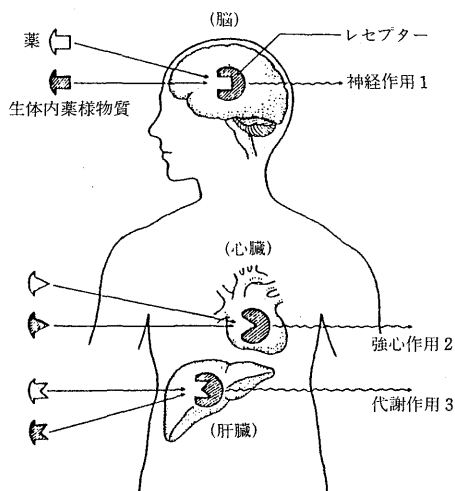


薬レセプターの生理的意義

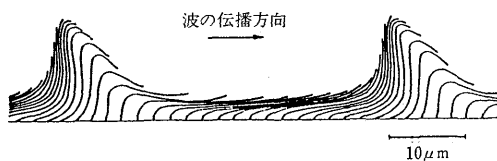


薬は生理物質のレセプターを借りて薬理作用を発揮する。

体の中に薬がある



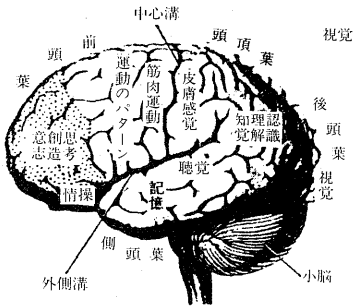
メタクロナール波の例 (Machemer, H., 1974).



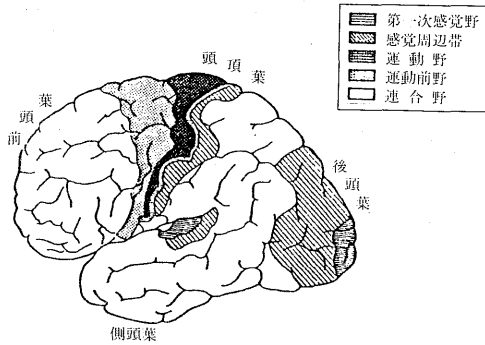
各繊毛がくり返す周期運動が少しずつずれており、繊毛の集団が作る山と谷が波として一方向に伝わる。

図49 脳の分業体制

ヒトの新皮質の分業体制



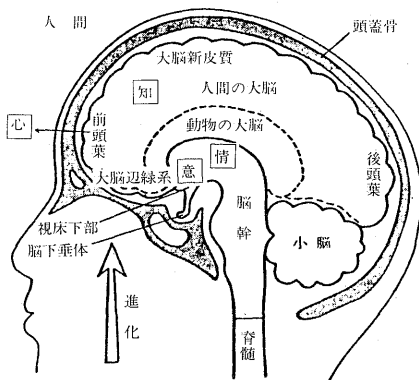
大脳通 連合野(白い部分)
ヒトの左半球の表面を示す



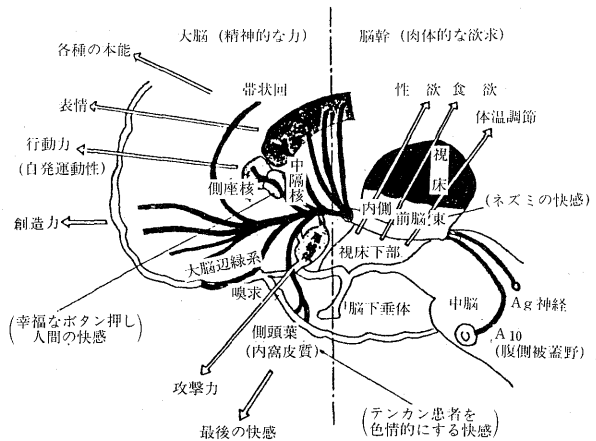
(23)

図50 こころの量子論 - 1

人間の脳の矢状断面図



快感を生み出す A₁₀ ドーパミン作動性神経



(5)

図Ⅲ 目次図式による主要領域の概観

④ 文化システム	⑤ 文化制度	⑥ 社会コミュニティ
記号・論理・メタファー (25)	文化のフェティシズム (36)	社会システムの構造と変化 (30)
論理と思想構造 (17)	情報と文化 (34)	社会と意味 (39)
造形構成の心理 (16)	記号論への招待 (1)	ネットワーキングへの招待 (13)
③ 生体システム	⑩ 経済制度	⑦ 政治制度
生命に情報を読む (18)	情報経済学 (43)	日本の政治 (14)
身体 (42)	情報化社会の政治経済学 (2)	情報とエネルギーの人間科学 (19)
② 行動システム	① 物理システム	⑧ 人格システム
行動の構造 (37)	経営者の役割 (31)	哲学の現在 (26)
意識と本質 (3)	管理の哲学 (38)	新哲学入門 (33)
言葉と無意識 (35)	密教・コスモスとマンダラ (24)	東西の哲学 (4)

()は文献番号

増田米二 「情報経済学」

5. 情報の生産構造

情報生産の一般的形態
コンピュータ情報の人工頭脳的生産
コンピュータ情報の自己増殖的生産構造
情報ユーティリティの経済的機能と構造
情報ユーティリティと経済構造の変革

6. 情報の消費構造

情報消費の一般的形態
マスコミ情報の消費構造
コンピュータ情報と消費構造
生産概念の質的発展と行動経済学

7. 情報市場の形成

印刷革命による情報市場の形成
新聞市場形成のメカニズム
コンピュータ情報市場形成の論理

4. 情報の経済価値

なぜ、情報は、経済学の対象たり得なかったか
商品としての情報財
コンピュータ情報の経済価値

1. 情報経済学の3つのフレーム・ワーク

フレーム・ワークの1——グローバルイズム精神
フレーム・ワークの2——情報エポック
フレーム・ワークの3——時間的価値
伝統的経済学と情報経済学のパターン比較

8. 情報化と産業構造

情報財を中心とする第四次産業の成立
第4次産業の産業構成
システム産業構造への展開
新しい概念による産業連関表

3. 情報の効用

情報の原型における効用
社会情報の効用
情緒的情報の効用
コンピュータ情報の効用

2. 情報の概念と基本構造

情報の原型とその基本概念
情報概念の歴史的発展
人類における情報概念の発展
人類史における情報概念の変遷と発展

9. 社会・経済原理としての目的法則

価格法則の歴史的分析
新しい基本法則としての目的法則と
共働的フィードフォード原理
終 未来実現的地球社会の実現をめざして
——情報経済学のビジョン——

(43)

池上惇 「情報社会の政治経済学」

6. 情報化社会の資本蓄積

部分情報の直接的生産者と全体情報の
集中利用者との分離
生活情報の生産者と全体情報の集中利
用者との分離
資本蓄積と情報の機能
——投機の経済学——

7. コンピュータ国家?

——情報化社会の官僚——
情報の独占か? 公共的規制か?
官僚制研究における軍隊と工場
情報化社会における計算可能性と学習能力

8. 情報化・国際化・多国籍企業

国際的共同研究開発体制とテレコム巨人
情報系列化と通信ネットワーク
新しい低開発国問題
国際機関の新しい役割

5. 新しい生活様式の誕生

サイバネティックな制御と新しい生活様式
新しい労働のリズムと新しい生活様式
自然と社会に対する認識の深化
仕事おこしと人間の発達

1. 情報化社会の提起したもの

情報と制御の視点からの生産と生活のみなおし
類人機械と類脳システムの潜在能力

2. 情報の学習・生産・占有

情報化とは何か?
情報と学習
情報の学習・生産・流通
情報インフラストラクチャ

9. 公共選択と財政組織

市場からの学習と社会制度の発展
公共選択と学習過程
情報と評価

4. 産業・雇用の変化と企業形態の改革

情報化社会の産業・雇用構造
産業形態のソフト化とサービス経済化を促進する要因
企業組織における集権と分権
「情報化」にともなう大企業の経営形態の変化
大企業による中小企業の再編成
マルチ・ジョブと不安定雇用の増大
公私両部門の分担関係の変化

3. 「情報化」過程における技術と労働

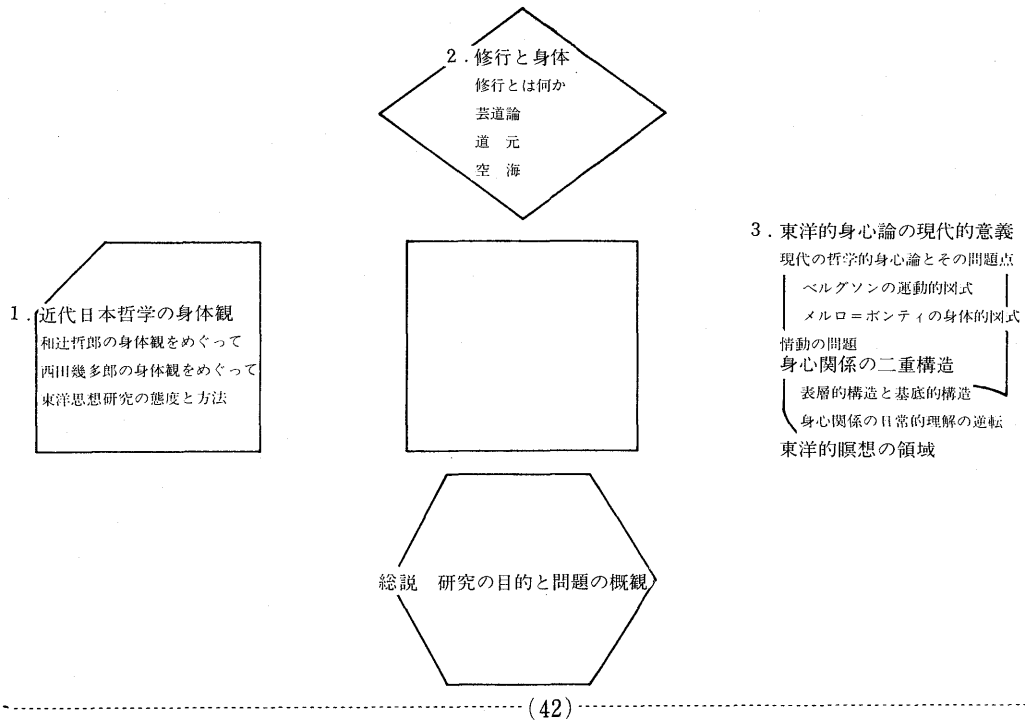
情報技術の特徴とサイバネティクス
工場とオフィスの神経組織をになう技術の
変革過程
産業用ロボットによる労働過程の変革
OA化とニューメディア

10. 情報化社会における人間の自立

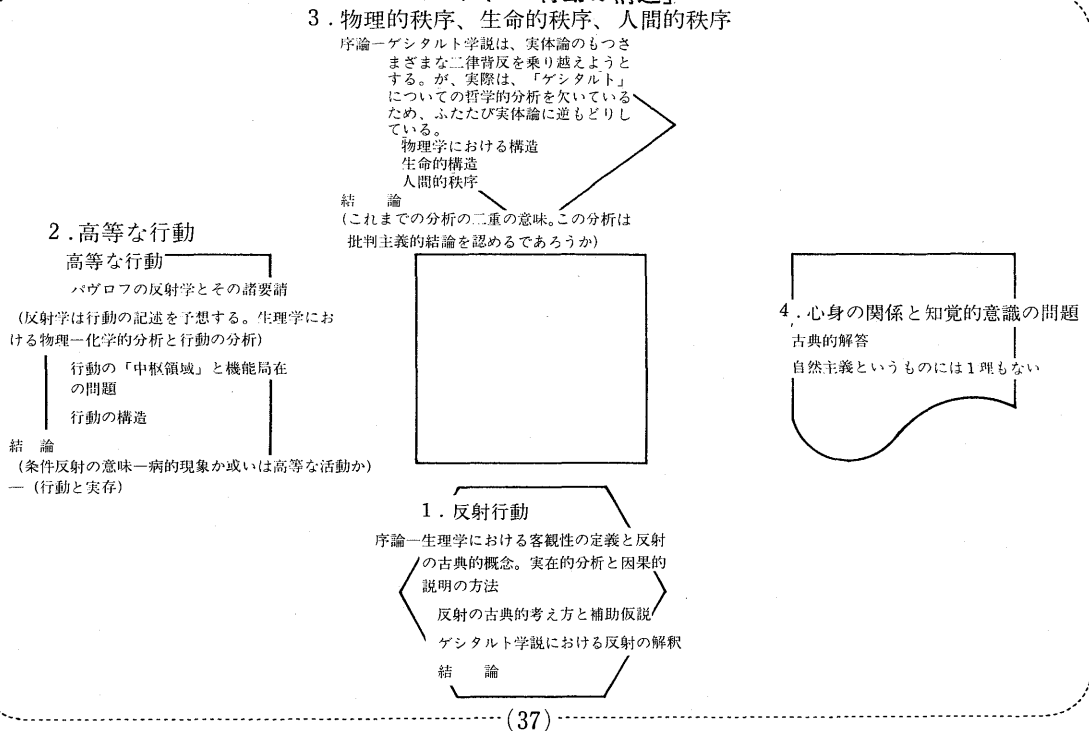
財政危機と勤労者家計の硬直化
私的保険と家計の硬直化
労働力の流動化と勤労者家計の硬直化
人間の潜在能力の発達とその障害の拡大

(2)

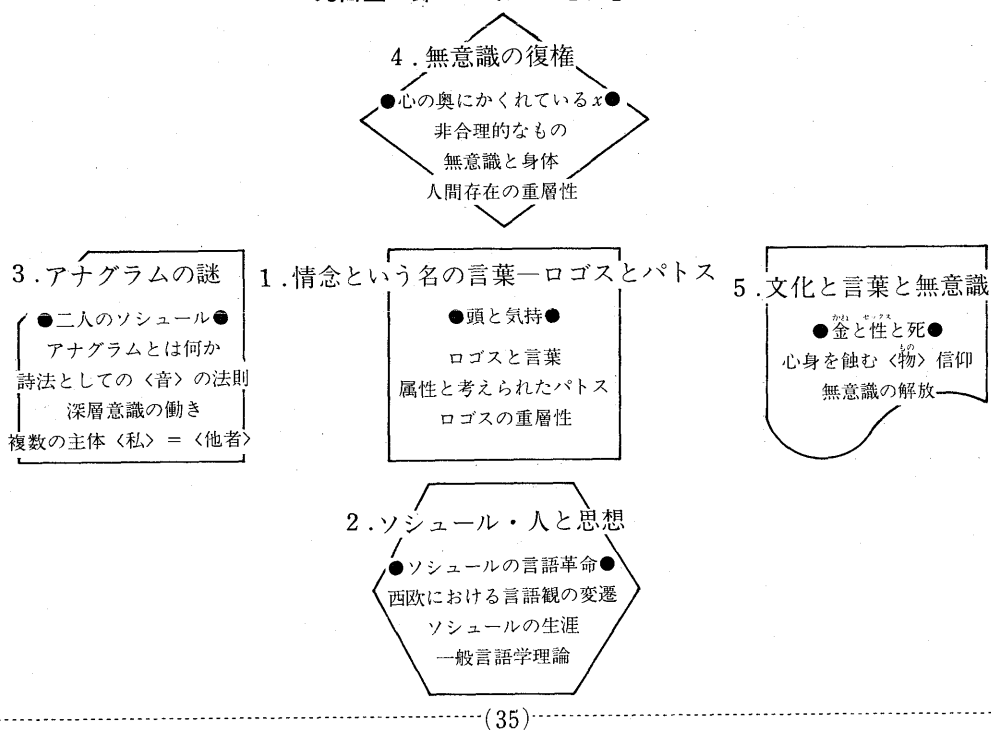
湯浅泰雄 「身体」



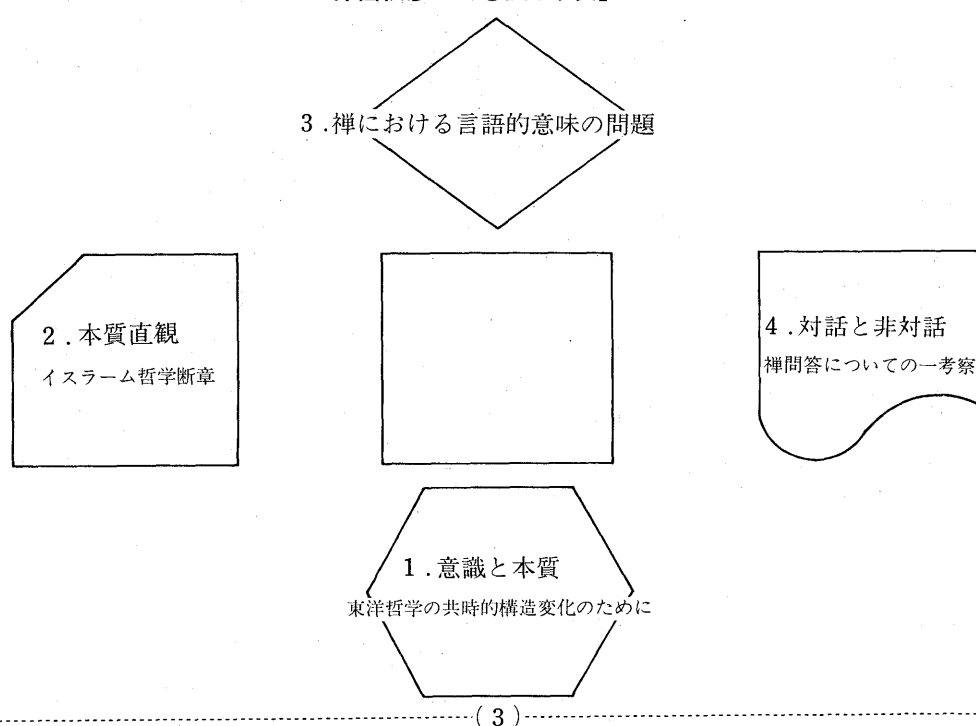
メルロ・ポンティ 「行動の構造」



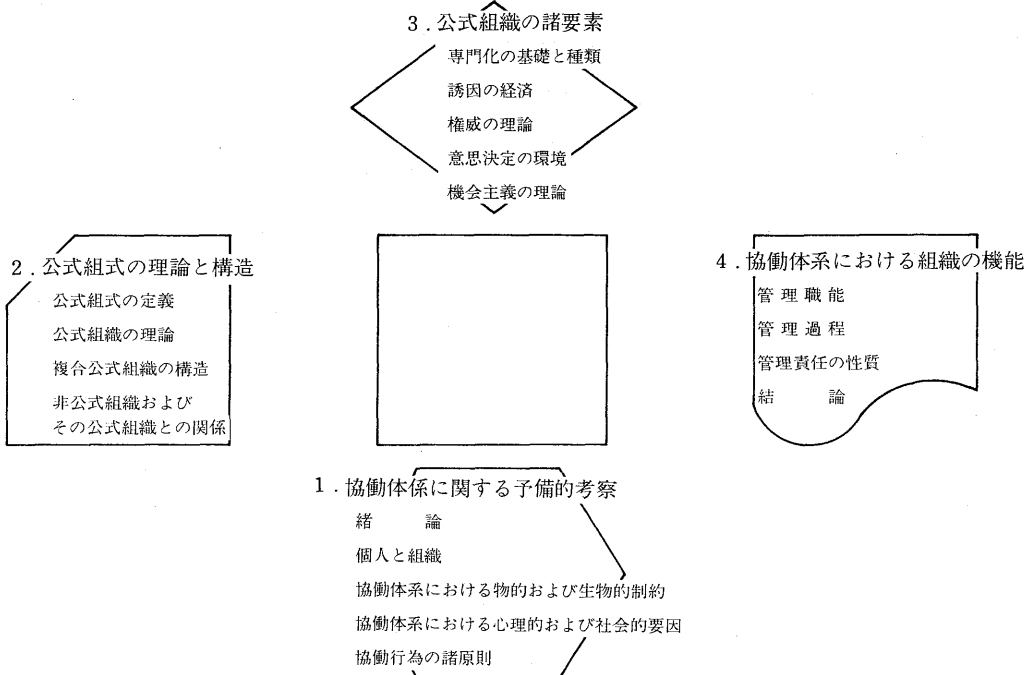
丸山圭二郎「言葉と無意識」



井筒俊彦「意識と本質」

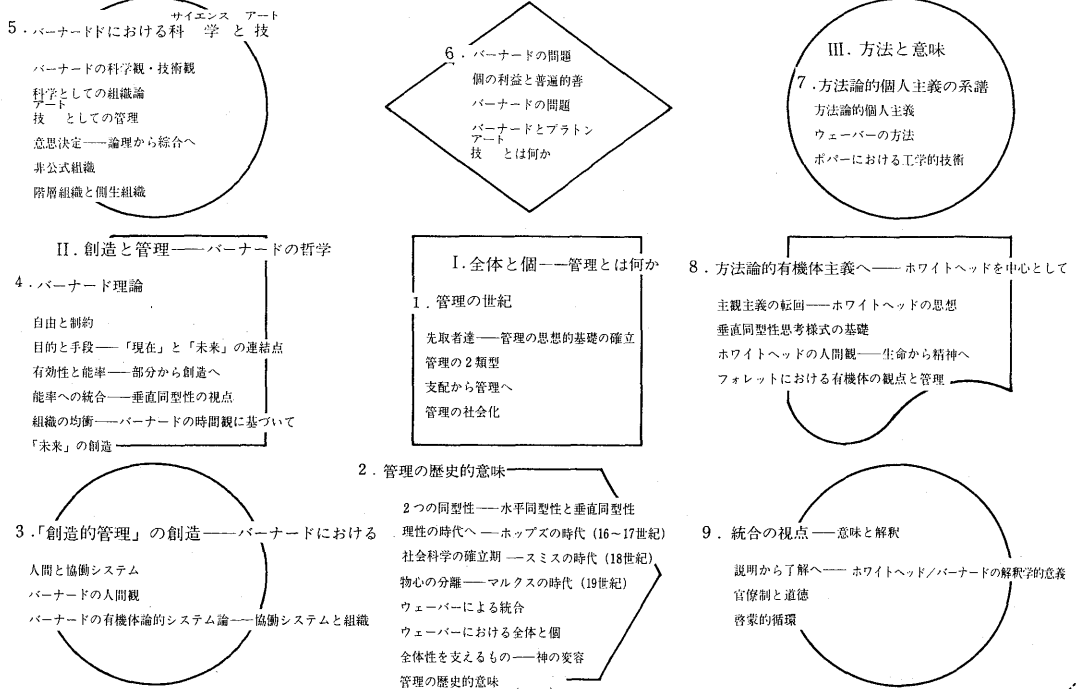


バーナード「経営者の役割」



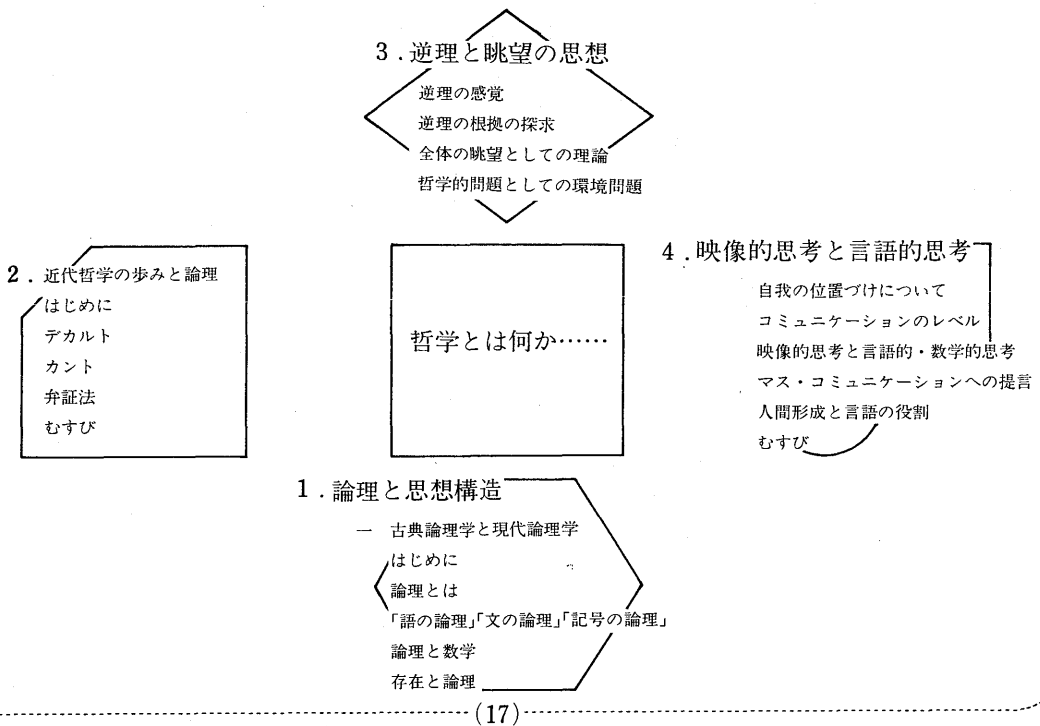
(31)

村田晴夫「管理の哲学」

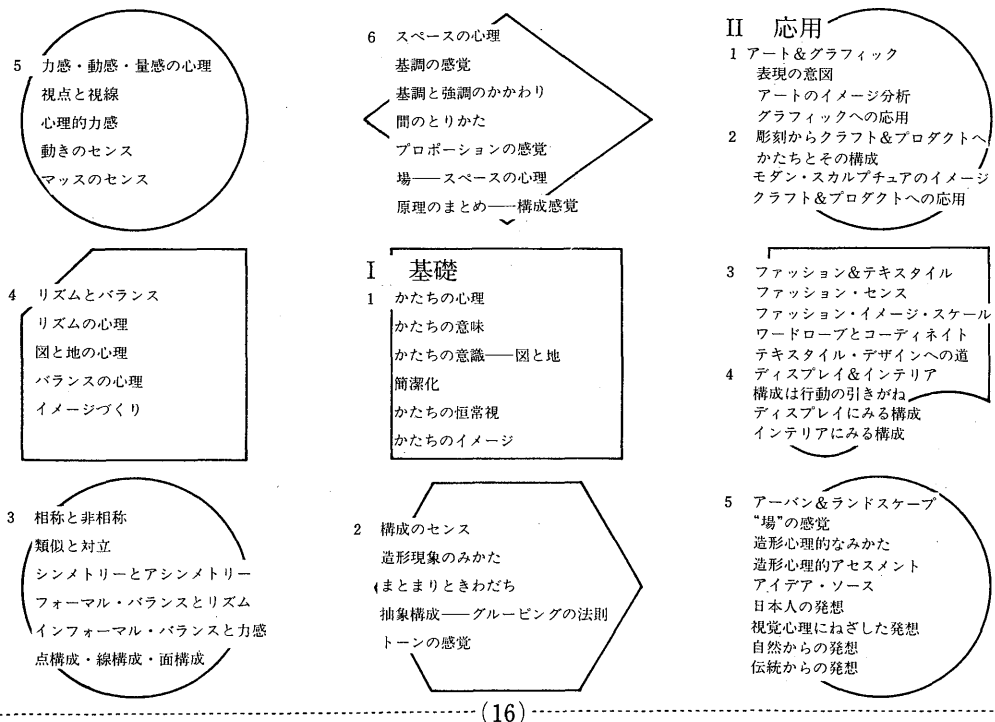


(38)

沢田允茂「論理と思想構造」



小林重順「造形構成の心理」



丸山圭二郎 「文化のフェティシズム」

3. 〈現前の記号学〉の解体

現前の記号学
記号学の歴史
ソシユールとテリダ
指向対象の非在
〈意味=現象〉としての記号
共同主観性
動きつつあるゲシュタルト

2. 病める動物=人間

—ホモ・パティエンス—
意味=現象
二重分節
文化の位相—コスモスとノモス—
言葉と道具
欲求と欲望
カオスの発生
「今、ここ」での人間

胡蝶の夢—序にかえて—

4. フェティシズムは超えられるか

言葉と文化の相同性と物象化
読むということ
反記号的実践

1. 本物と偽物

畸形化した現代文化
フェティシズムとは何か
4つのイドラ
科学という名の物神

(36)

松岡正剛 「情報と文化」

4. 文化のゲーム

十人十色で ENCULTURATION
利己主義者の冒険 GENE & MEME
ノイズと怪物 SIMULATION
引用の国 METAPHORISM

3. 経済の神話

技術のバレリーナ THRESHOLD
コンピュータと遊芸人 NETWORKERS
自律する組織 CATALACTICS

1. 情報の森

謎のソフトウェア HOMEOSTASIS
ふたつの裁将来 INFRASTRUCTURE
通信の王様 INFORMMUNICATION
電子の資本主義 ON-DEMAND MEDIA

5. 多様性・同時性・選択性

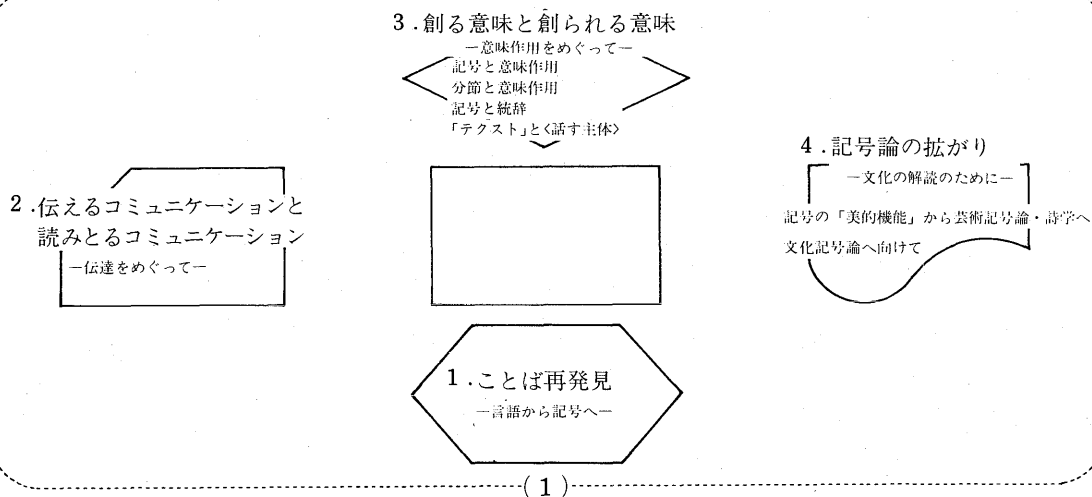
黒板の中の情報論 MODULATION
適応と病院 REQUISITE VARIETY
加速する機械群 SYNCHRONICITY
黙って遊んでいる CANALIZATION

2. システムの歩行

バーティと小鳥 CYBERNNETICS
情報は生きている IMAGE PROCESSOR
カオスの記憶 FLUCTUATION
見えない指揮者 ENTRAINMENT
声のある記号 CODE BREAKER

(34)

池上嘉彦「記号論への招待」



中村雄二郎「記号・論理・メタファー」

6. メタファーの構造と論理

まえがき

「名の転用」としてのメタファー
メタファーの問題性
メタファーの所在
ディスクールとしてのメタファー
新しい意味の創造

7. 虚構と真

虚構の言語分析
虚構の構造
虚構の言語使用
「真」の現象学

8. テキスト・文体・意味

量あるいは規模としてのテキスト
質あるいは実践としてのテキスト
テキストと作品
文体概念と意味
思考・意味と言語衣裳観

5. 日常言語の論理構造

はじめに

自然言語の組織的記述
意味の複合性原理

1. 記号・論理・メタファー

—縦横断的考察の試み—

記号と人間——はじめに
経験主義的ロゴス＝言語論の原型
擬制的実在＝言語への照射
〈4つの主要な比喻〉
隠喩—換喩の二元論からの出発
おわりに——歴史とメタファー——

9. 象徴と解釈

象徴とは何か
象徴の解釈

4. 事実と論理

事実の記述
数学的および物理的理想化
実在と可能世界
論理と論理学
論理と可能世界
論理と実在(1)
論理と実在(2)

3. 数と論理

—無限の逆説—
無限の階層
パラドックスの克服
新たな逆説

2. 記号と意味

記号の意味への問い
シニフィアンとシニファイエ
刺激意味と指示対象
記号と情報
意味論的情報
記号と情報
意味的情報
情報の第1義性
情報の関係
情報・状況・意味

10. 論証と説得

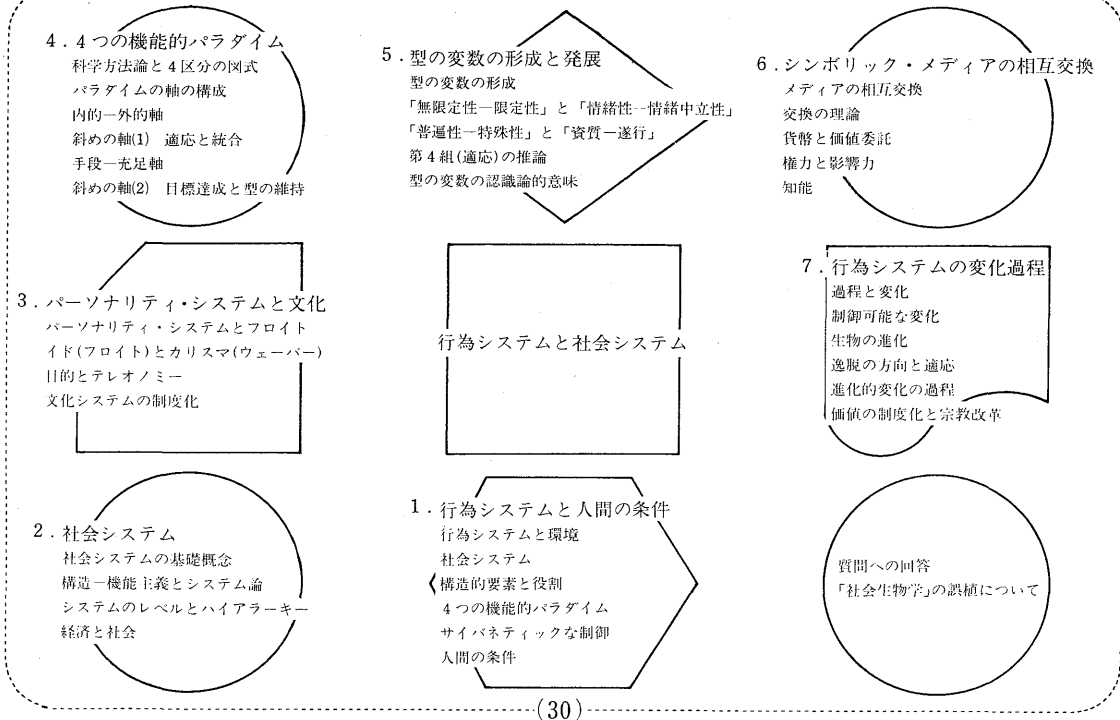
はじめに

パルメニデスの論理的存在論とゼノンの反論術
レートリケーの誕生と流行
反論術からエリスティケーへ
レートリケーに対するプラトンの批判
イソクラテスのレートリケーを中心とする教養
プラトンのディアレクティケー
アリストテレスによる総括

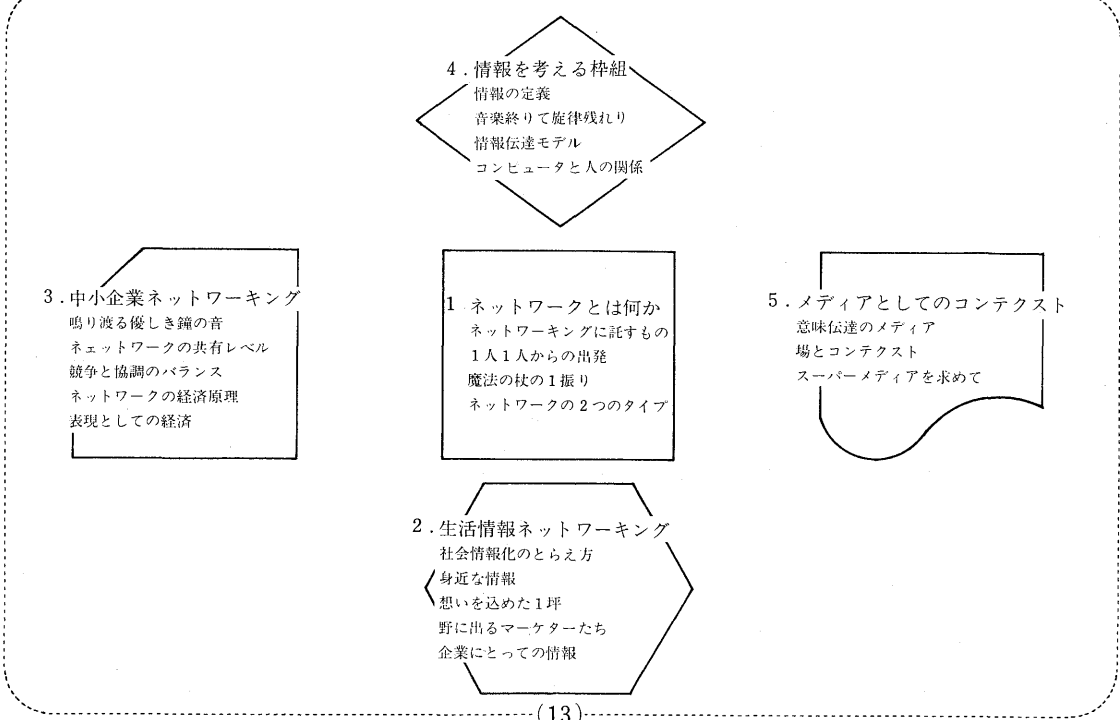
11. 説明・記述・理解

説明の理論
説明と理解

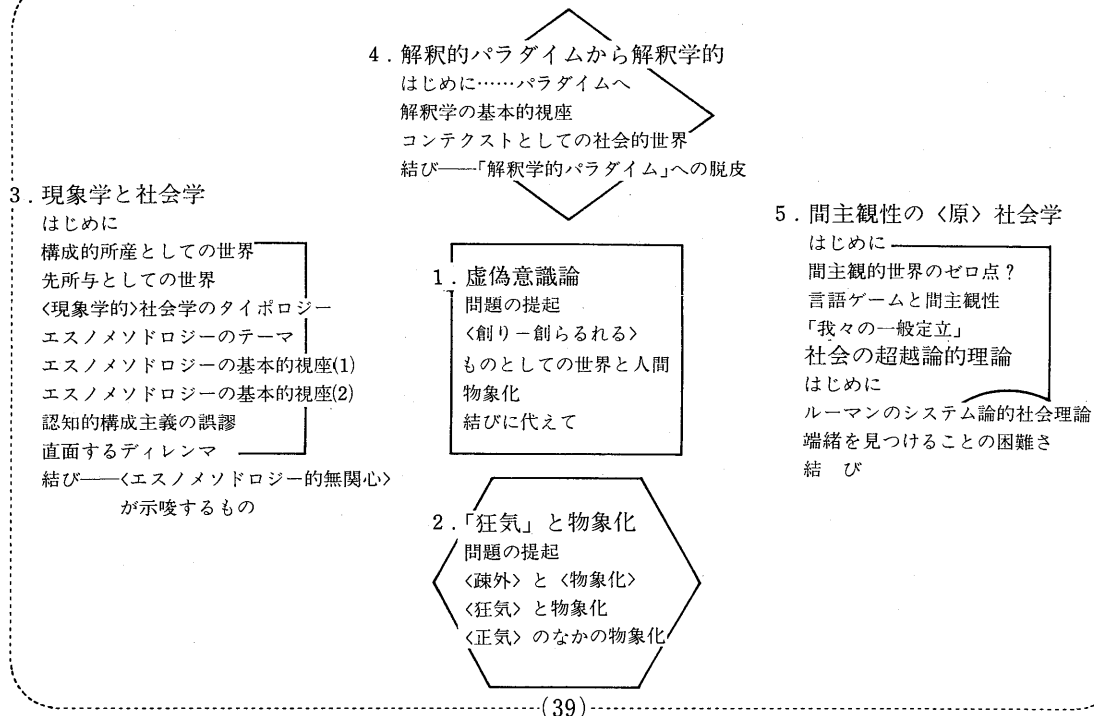
パーソンズ「社会システムの構造と変化」



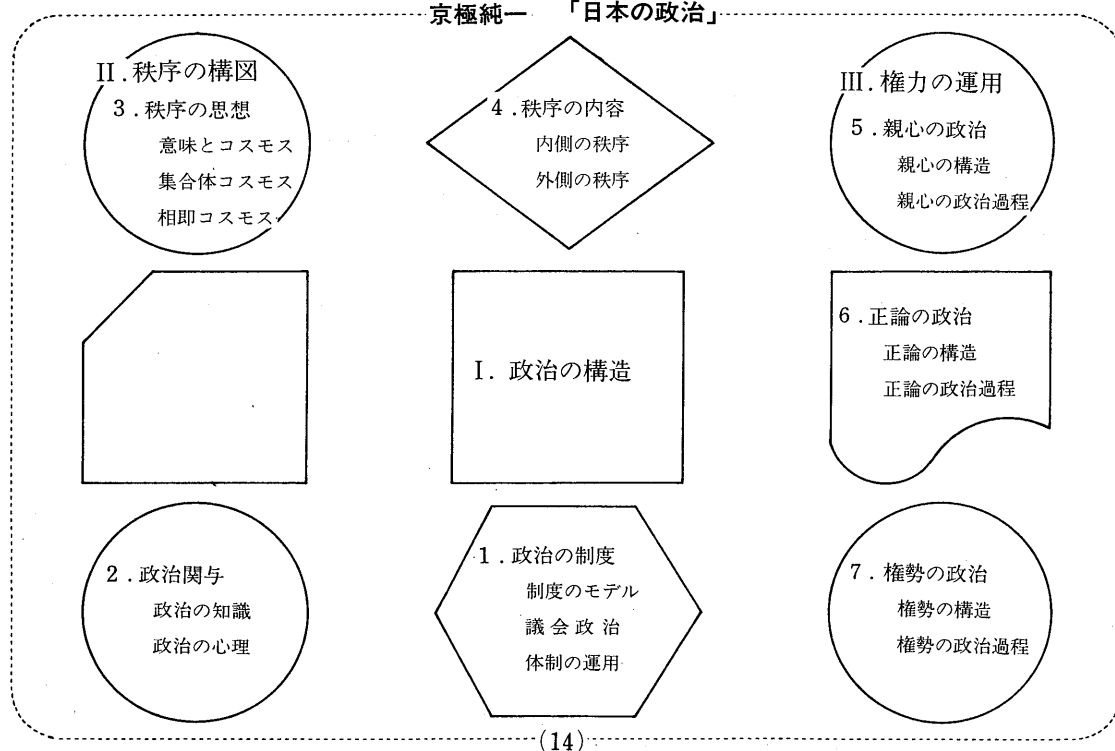
金子郁容「ネットワーキングへの招待」



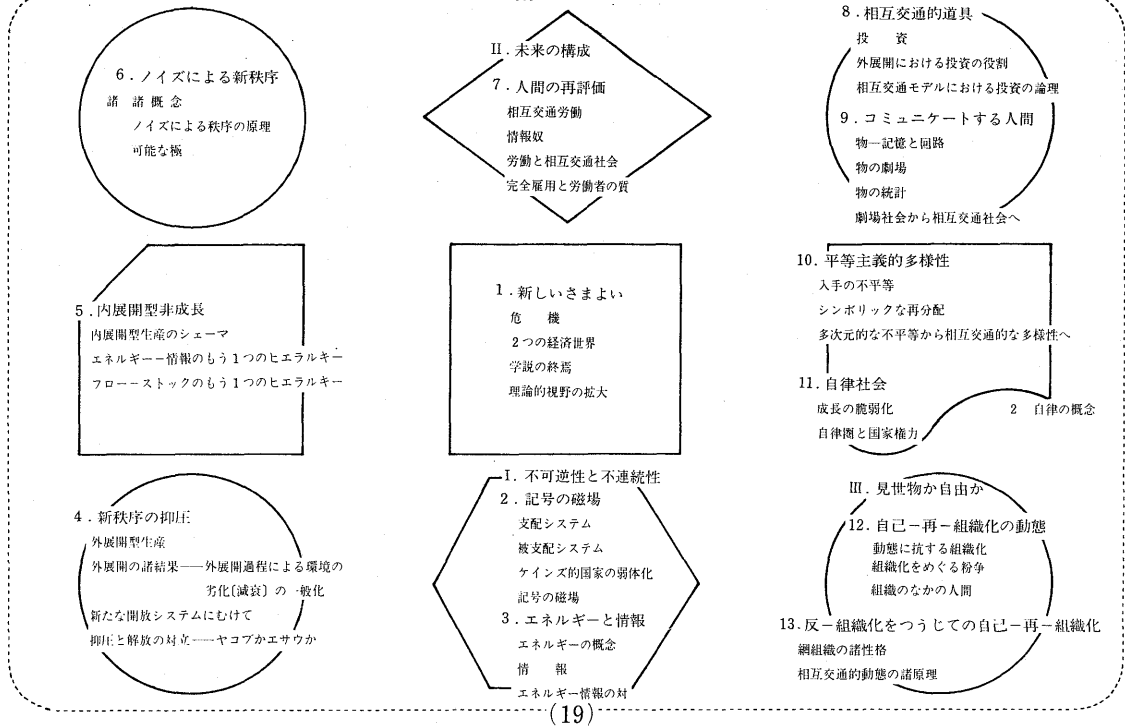
山口節郎 「社会と意味」



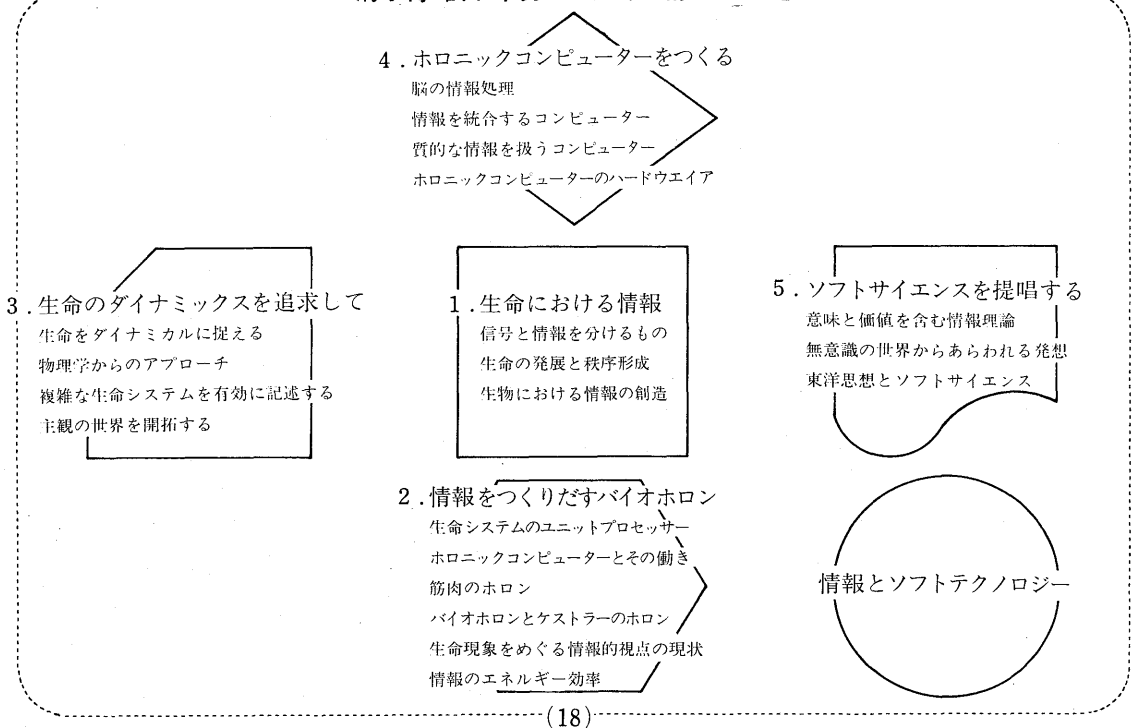
京極純一 「日本の政治」



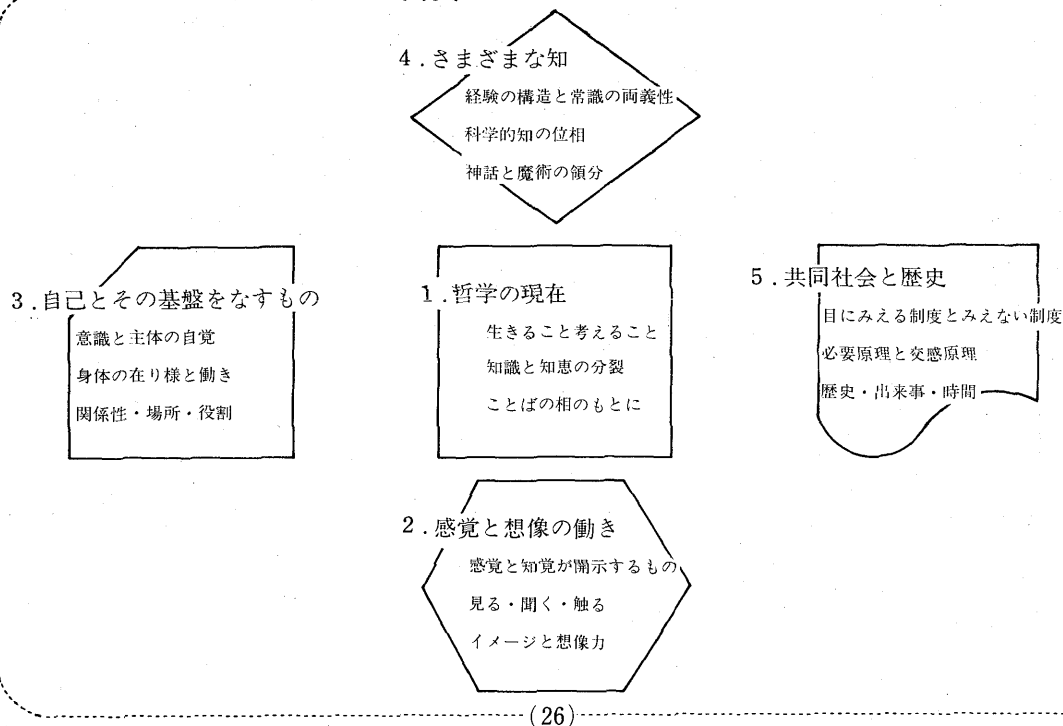
ジャック・アタリ 「情報とエネルギーの人間学」



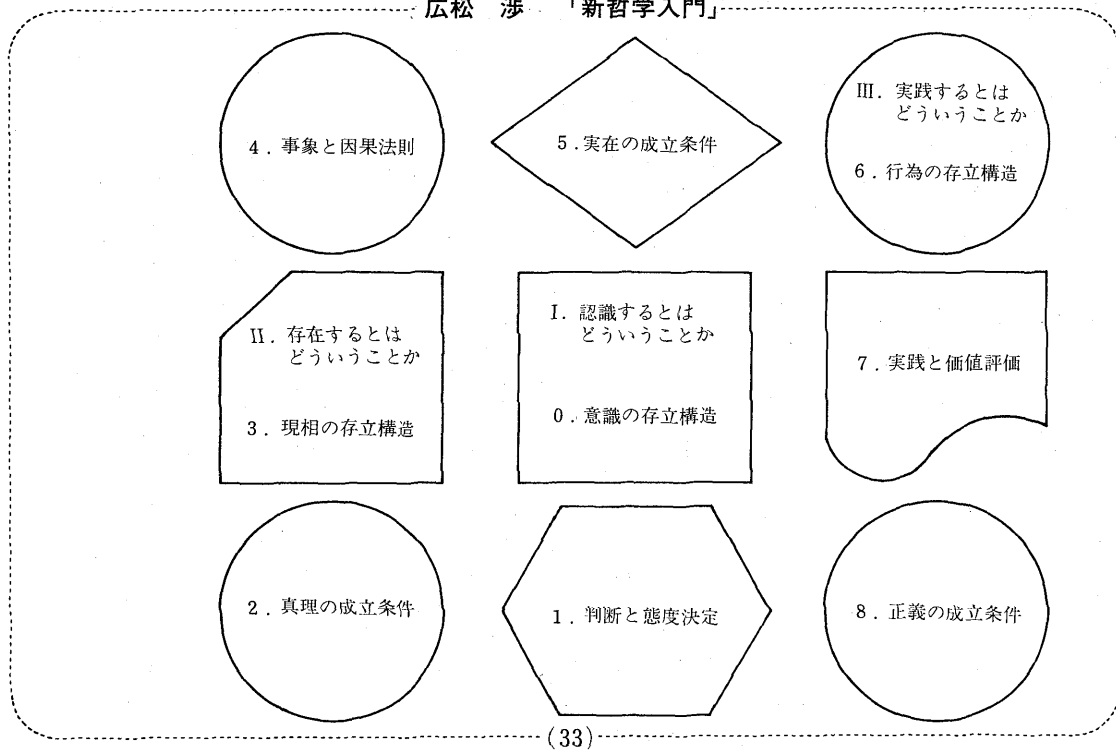
清水博・餌取章男 「生命に情報を読む」



中村雄二郎 「哲学の現在」



広松 渉 「新哲学入門」



今道友信 「東西の哲学」

4. 宗教と超越

宗教に関する比較研究の必要性
三つの契機
人間の位置
士は汝のために詛はる
内在造化による超自然の排拒
罪の意識と恩寵
執着の風化
存在の類比と痛みの類比

5. 倫理の方位

「倫理学」の名称について
挨拶の現象学
訪問の儀礼
空間的名称による呼称について
道徳の普遍性と特殊性
人間の現実或るいは人生について
人格と責任
西洋に於ける責任
仮面と道徳
自然の利用と自然への随順

6. 芸術の理念

再現と表現
写意と形似
言語芸術について
風土と詩歌——月詠考
幽玄と神秘
沈黙
音楽について

3. 論理の性格

真理の二形態
命題形成の問題
動詞の不定法と変化形——実在と現象
生命の充実と未来の喪失

緒論——比較研究への誘導

比較研究の興隆理由
比較研究の類型——第1のタイプ
比較研究の類型——第2、第3のタイプと
本書の意図
東西の哲学比較研究の予備作業
比較研究の危険性と本書の方法的特色

7. 認識の構造

記述と判断の対立
間の問題
シナに於ける見ること
日本語に於ける見ることの意味
西洋に於ける形の意味
像の位置

2. 言語と思考原型

個人意識と帰属意識——自己紹介
時間と空間——アドレスの書き方
人称と状況——対話の主体
弁証法と談合
直観の対比

1. 両立性と反立性

主題と構成
文化比較の必要性
比較研究の方法論的考察
解放と原動力
真理と論理存在学的方位
自己自身についての反省——倫理学的考察
表現と再現
技術の問題
実践的三段論法の逆転について
形の哲学の敗退
過去への反立と想像力

結論——比較研究よりの提言
東西に於ける相違の現実
文化の補完的力動性
根源的問ひの同一的力動性
3つの課題

(4)

松長友慶「密教・コスモスとマンダラ」

4. 宇宙と人間

真理の人格化
大日如来

3. 真理の表現

曼荼羅
密教の儀礼

1. 密教のおいたち

2. 行と体験

論伽の行
体験の相承

5. 社会と個人

非俗から俗へ
生活の規範

(24)

〔参 考 文 献〕

- (1) 池上嘉彦『記号論への招待』, 岩波書店, 1984。
- (2) 池上惇『情報社会の政治経済学』, 昭和堂, 1985。
- (3) 井筒俊彦『意識と本質』, 岩波書店, 1983。
- (4) 今道友信『東西の哲学』, TBSブリタニカ, 1981。
- (5) 大木幸介『こころの量子論』, 日経サイエンス社, 1984。
- (6) 嘉味田朝功『営業店管理者のリーダーシップ』, 全国地方銀行協会, 昭和58年。
- (7) 嘉味田朝功『企業文化と経営教育』, 経営情報, 第3巻第4号, 1985。
- (8) 嘉味田朝功『ホロン型リーダーシップの実践』, 経営情報, 第4巻第2号, 1985。
- (9) 嘉味田朝功『相手理解』, 経営情報, 第5巻第2号, 1986。
- (10) 嘉味田朝功『多人数教育における行動科学的試行』, 中部大学経営情報学部論集, 第2巻第2号, 1986。
- (11) 嘉味田朝功『人間関係論再考——記号論・認知科学・脳生理学をベースに』, 経営情報学部論集, 第3巻第1号, 1987。
- (12) 嘉味田朝功, 松浦敬紀『行動記号論序説』, 経営情報学部論集, 第3巻第2号, 1987。
- (13) 金子郁容『ネットワークキングへの招待』, 中央公論社, 1986。
- (14) 京極純一『日本の政治』, 東京大学出版会, 1983。
- (15) 公文俊平『社会システム論』, 日本経済新聞社, S. 53。
- (16) 小林重順『造形構成の心理』, グヴィッド社, 1978。
- (17) 沢田允茂『論理と思想構造』, 講談社, 1977。
- (18) 清水博・餌取章男『生命に情報を読む』, 三田出版会, 1986。
- (19) ジャック・アタリ『情報とエネルギーの人間科学』, 日本評論社, 1983。
- (20) 須之部淑男『情報代謝論』, 心情報論, 電通, 1986。
- (21) 竹原弘『世界と意味体系』, 徳山大学論叢, 第24号, 1985。
- (22) 田里亦無『道元禅入門』, 産業能率大学出版部, 1973。
- (23) 時実利彦『人間であること』, 岩波書店, 1970。
- (24) 松長有慶『密教・コスモスとマンダラ』, NHKブックス, 昭和60年。
- (25) 中村雄二郎『記号・論理・メタファー』, 岩波書店, 1986。
- (26) 中村雄二郎『哲学の現在』, 岩波書店, 1977。
- (27) 中山正和『演繹・帰納・仮説設定』, 産能大, S. 54。
- (28) 西村公朝『仏の世界観』, 吉川弘文館, S. 54。
- (29) 蓮沼啓介『情報革命と日本語学』, 日本語学, 第3巻第4号, 1984。
- (30) パーソンズ『社会システムの構造と変化』, 創文社, 1984。
- (31) バーナード『経営者の役割』, ダイアモンド社, S. 31。
- (32) 藤岡喜愛『イメージと人間』, NHKブックス, S. 49。
- (33) 廣松渉『新哲学入門』, 岩波新書, 1988。
- (34) 松岡正剛・戸田ツトム『情報と文化』, 1986。
- (35) 丸山圭二郎『言葉と無意識』, 講談社, S. 62。
- (36) 丸山圭二郎『文化のフェティシズム』, 勁草書房, 1984。
- (37) メルロ・ポンティ『行動の構造』, みすず書房, 1964。
- (38) 村田晴夫『管理の哲学』, 文真堂, S. 59。
- (39) 山口節郎『社会と意味』, 勁草書房, 1981。
- (40) 山口陽子『生物リズムと引き込み』, 生命現象のダイナミズム, ヒューマンサイエンス3, 中山書店, 1984。
- (41) 山口昌哉『システムの新しいかたち, フラクタルについて』, 人間協働, 文真堂, S. 63。
- (42) 湯浅泰雄『身体』, 創文社, 1977。
- (43) 増田米二『情報経済学』, 産業能率大学出版部, S. 51。
- (44) ルーメルハート『人間の情報処理』, サイエンス社, S. 54。
- (45) 渡辺慧『認識とパタン』, 岩波書店, 1978。
- (46) 渡辺茂『デジタル思考とアナログ思考』, 光文社, 1980。
- (47) 富永健一『日本産業社会の転機』, 東京大学出版会, 1988。
- (48) 今田高俊『モダンの脱構築』, 中公新書, S. 62。
- (49) 今井賢一／金子郁容『ネットワーク組織論』, 岩波書店, 1988。
- (50) 産業能率大学『組織開発事例集』, 教育システム研究資料シリーズNo.4, 産業能率大学総合研究所。